

# 令和3年度東京都自立支援協議会セミナー

本人中心の暮らしはこうして実現する！

日 時：令和3年12月13日（月曜日）13時20分～16時10分

会 場：東京都庁第一本庁舎5階 大会議場

(司会) 皆様、こんにちは。ただ今から、令和3年度東京都自立支援協議会セミナーを開会いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、東京都心身障害者福祉センター地域支援課長の森下でございます。よろしくお願いいたします。

お手元の冊子の3ページをご覧ください。本日のプログラムを記載してございます。

本日のセミナーは、第1部に基調講演を、第2部にパネルディスカッションを行います。途中、休憩時間を予定しておりますが、トイレ等の案内が必要な場合や、気分が優れない場合など、ご用がありましたら、遠慮なく黄色い名札を付けたスタッフにお声かけください。

それでは開会に当たり、東京都心身障害者福祉センター所長の梶野からご挨拶申し上げます。

## 開会挨拶

### 梶野 京子（東京都心身障害者福祉センター所長）

(梶野) 皆様こんにちは。東京都心身障害者福祉センター所長の梶野でございます。

皆様、本日は、年末の何かとお忙しい中、東京都自立支援協議会セミナーにご参加をいただきまして、ありがとうございます。

本日のセミナーは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止ということで、会場の定員を少なくして開催をさせていただいております。ご来場の皆様におかれましては、既に受付の時にご協力いただいておりますけれども、マスクの着用や手洗い、手指消毒などにご協力いただきますよう、改めてお願いいたします。

また、会場への参加は難しいけれども、登壇者の話を聞きたいという方々のために、セミナー終了後に、期間限定で動画配信を行うこととしております。会場ご参加の方と動画視聴の方を合わせますと、500名近くの方にお申込みをいただいております。皆様のご関心の高さを改めて実感するとともに、東京都自立支援協議会委員の皆様をはじめ、関係者のご協力の下、本日このような形でセミナーを開催できますことに、心より感謝を申し上げたいと思います。

さて、都の自立支援協議会では、今年度、「当事者の視点に立って地域課題を検討する」、こちらを協議事項として活動を行っております。本セミナーではその一環として、「本人中心の暮らしはこうして実現する！」をテーマに、先程、司会からご案内ありましたように、基調講演とパネルディスカッションを実施いたします。

まず、第1部では、「全国の地域移行・地域生活の効果的な支援モデル～本人の望む暮らし・家族、支援者、地域は変わる～」をテーマに、群馬医療福祉大学社会福祉学部講師の新藤健太様にご講演をいただきます。

そして第2部では、「地域移行、私の想いは伝わった？」をテーマに、パネルディスカッションを行います。はじめに、障害や難病のある方とその支援者の方、4名の方々から、それぞれご経験を踏まえてご発表をいただきまして、その後、武蔵野大学人間科学部人間科学科教授で、東京都自立支援協議会の会長でもある岩本操様にコーディネーターをお願いしまして、ディスカッションを進めてまいります。また、第1部で基調講演をいただく新藤様にも、引き続きコメントーターとして加わっていただきます。

限られた時間ではございますが、このセミナーが、ご参加、また後ほどご視聴される皆様にとって、当事者の方々の率直な想いを受け止め、地域移行、地域生活について改めて考える機会となり、日々の取組や暮らしの中で役立てていただけますことを願ひまして、開会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(司会) 梶野所長、ありがとうございました。

続きまして、事務局より連絡事項を申し上げます。

(事務局) 事務局から連絡いたします。

初めに、新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、会場へご参加の皆様へお願いです。

セミナー開催中は、マスクを着用してください。また、マスクを交換した際の使用済みマスクはお持ち帰りください。休憩時は、小まめに手洗い、手指の消毒をお願いいたします。体調不良等、いつもと異なる症状がある方は、お近くの黄色い名札を着けたスタッフにお声がけください。セミナー終了後、2週間以内に新型コロナウイルス感染症に感染したことが判明した場合は、事務局までお知らせください。事務局の連絡先は、お手元の冊子の表紙裏面に記載しております。

次に、動画撮影に関するお知らせです。

本日のセミナーは、後日、動画配信をするため、撮影をしております。撮影はステージのみとし、会場の皆様は撮影いたしません。

会場にご参加の皆様による録音や写真、動画の撮影はご遠慮ください。

なお、事務局では、記録のために写真撮影をさせていただきますので、ご了承ください。

以上となります。

ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

(司会) それでは、第1部、基調講演です。新藤健太さん、ご登壇ください。

本日の講師をご紹介します。群馬医療福祉大学社会福祉学部講師、新藤健太さんです。

本日は、「全国の地域移行・地域生活の効果的な支援モデル～本人の望む暮らし・家族、支援者、地域は変わる～」と題し、ご講演いただきます。

それでは、新藤健太さん、よろしくお願いいたします。

## 基調講演

「全国の地域移行・地域生活の効果的な支援モデル  
～本人の望む暮らし・家族、支援者、地域は変わる～」  
新藤 健太（群馬医療福祉大学社会福祉学部 講師）

(新藤) はい。群馬医療福祉大学の新藤です。よろしくお願いいたします。着席してお話させていただきます。失礼します。

私も、コロナ禍の前は、結構こういう形で、対面でお話をさせていただくことも多かったんですけども、コロナ以後は、今日が久しぶりの復帰戦みたいなところがございまして、こうして皆様を前にお話しさせていただくと、何かどきどきしてきてしまいます。ちょっとマスクを着けながらということで、皆様の表情もなかなかわかりづらいところもあるんですが、温かく聞いていただければと思います。よろしくお願いいたします。

先程、ご紹介にあずかりました、私、群馬医療福祉大学の新藤と申します。テーマは、「全国の地域移行・地域生活の効果的な支援モデル～本人の望む暮らし・家族、支援者、地域は変わる～」ということでございます。先程、ご挨拶の中でも、改めて、地域移行について考えるきっかけになればいいなというようなお話がございましたが、私の話も聞いていただいて、それぞれに地域生活っていうものは一体何だったんだろうとか、これから取り組んでいくべきことって何なんだろうかということと一緒に考えていけるような、そういうきっかけになればいいなと思っております。

こちらが私の紹介になりまして、簡潔に紹介させていただきたいんですが、私、大学のほうではソーシャルワーカーの養成に携わっております。若干、プログラム評価と、わかりづらいと思うんですが、これが何かといいますと、例えば、まだ制度になっていないような、あるいは制度はあってもなかなか効果が上げられないようなそういう仕組みについて、継続的に、どんなやり方がいいんだろうかっていうことを振り返ってより良い取組にしていく方法論を、プログラム評価と呼んでおります。最近、ちょっと、いろいろなところで注目をされている方法論でございます。この方法論を使って、これまで、ここにございますように、障害を持った方のお仕事の就労支援の効果的な支援方法とか、あるいは生活困窮の方の効果的な就労の方法とか、そういうものについて、一体どういう在り方が効

果的なんだろうか、より効果的なんだろうかということの研究してまいりました。同じ方法論を使いまして、この国の大きな社会課題の1つというように私は認識しているんですが、知的障害のある方の地域移行、地域生活支援を効果的に進めていくための方法論について、調査、研究をさせていただいているわけでございます。

こちらは、ちょっとスライドの中にはないんですが、文部科学省の科学研究費というものをいただきまして、その中で研究をさせていただいているものでございます。

今日の私の話のアウトラインは、おおよそこんな感じになっておりまして、1時間ということなので、ここが1番私がどきどきしているところなんですが、時間をオーバーしてしまったり、あるいはとてつもなく早く終わってしまったりしないんだろうかということ、こちらはどきどきしているわけですが、まず、改めて今更なんですが、なぜ地域移行なのかということ、皆様と一緒に共有していきたいと思っております。その後、全国の素晴らしい実践の経験からということで、ここが私の今日の話の1番のメインになるわけですが、後ほど出てきますが、全国の16法人、知的障害のある方の入所施設であったりとか、地域移行支援に取り組まれている全国16か所の施設様の担当者様からいろいろな話をお伺いしまして、それについて、どんな想いでこの方々は地域移行に取り組んでいらっしゃるのかと、どんな工夫をされているのかということをお話しさせていただくというのが、今日の話のメインになります。

その後、若干、15分、20分ぐらい時間を残しまして、効果的な支援モデルを提案する、つくっていくということは何なのかということをお話しさせていただいた後に、自立支援協議会、協議会に私が期待したいこと、あるいは今日お集まりの皆様、いろいろなお立場でご参加されていると思うんですが、皆様と協働していく、協働していった社会課題を解決していくって1つの有効な方法論について提案をさせていただきたいというのが、今日の話になります。

それでは、まず、なぜ、地域移行・地域生活なのかということでございます。こちら、結構、ホームページとかを検索すればすぐに出てくるものでございまして、施設入所者の地域生活移行者数の推移について、こういうふうにグラフになっているわけでございます。ここに、障害福祉計画の第1期から、今、第6期なわけですが、それぞれ目標値などが設定されているわけでございます。障害のある方の、自己紹介のところ、私、申し上げなかったんですが、大学の教員をやる前は、私も知的障害のある方の現場で仕事をしておりまして、14年ぐらいでしょうか、入所施設からキャリアをスタートさせまして、その他の通所の生活介護であったりとか、それからグループホームの世話人も3年間ぐらいやらせていただいたんですが、それぞれ、今、地域移行をこれぐらい進めていくというような数値が書いてあるわけでございます。

制度のほうも措置制度、昔は措置制度という制度だったわけですが、措置から支援費制度に変わり、そして自立支援法、今の障害者総合支援法と変わっていく中で、日本でも、明確に入所施設からの地域移行が目指されるようになってきたわけでございます。その間、関連する制度としては、今日の後半のシンポジウムのところでもご登壇ございますが、相談支援事業の地域移行支援とか地域定着支援がスタートしたりとか、あるいはグループホームがたくさんできたりですとか、それから、ここ最近新しいところでいいますと、自立生活援助という、一人暮らしをされていく障害のある方を応援するような、そういう制度ができたりですとか、あるいは日中活動の場ということで言うと、就労継続支援だったりとか生活介護があったりとか、様々なサービスがある中で、地域移行達成を目指していくわけでございます。

こちらですね、第6期、今第6期でございますが、第6期の成果目標を見ていきますと、ここに、10%、30%とございまして、ここで6%ということで、令和元年度末施設入所者の6%ですね、令和元年度末全体の6%以上が地域生活、地域移行していくということが目指されているわけでございます。ざっと見ていくだけでも、当初高かった、30%ぐらい、全体の入所者の30%ぐらいを地域移行していただくというような目標設定から、段々ですね、もちろん、最初の頃に地域移行しやすい方々が地域移行されていって、なかなか難しい方々が残られているというような事情もある中で、

目標自体は小さくなっていくということもあるわけでございます。そんな中で、現場の方からは、当初あったような地域移行を達成するんだというような思い自体が、何か全体として少し小さくなっていくような、そんなことがあるんじゃないかというような話も聞くわけでございます。

こちら、私、大変印象に残っているんですが、この研究に取りかかって、本当に最初の訪問先でございました施設の方が、ちょっと施設名のほうは、研究を依頼する時に公表に当たっては匿名化させていただきますというようなお約束をしていたものですから、これはどここの施設さんのエピソードですとお伝えできないのが非常にもどかしいんですが、1番最初にお話をお伺いした施設様の語りでございます。ちょっと、何か考えるきっかけになると思うんですが、こちらに概要が書いてあるんですが、その方の言葉では、何年か前に、あれから4年経ったなど、こういうふうに話が始まりまして、法人が地域移行に真剣に取り組み始めてから3年目の利用者さんの話でございました。この方は地元からちょっと離れたところに入所されていて、そういう方も結構たくさんいらっしゃるわけですが、どうしても地元に戻りたいと、なぜなら、お母様が高齢で、お母様が住んでいる地域に戻りたいんだと、そういうことをおっしゃったわけでございます。ただ、都合よくグループホームとかそういうものがあるかという、なかなかなかったりするわけでございます。それで、この方はまずは地元のお母様の近くの入所施設に、入所施設から入所施設なんですけれども、入所施設に戻ろうと、お母様が高齢ですから、来やすいところに帰ろうじゃないかと、そういうふうに始まったわけでございます。その時に、ここにありますが、前の理事長さんなんです、その時、11年前に施設から施設に戻られる時に、この方はこの施設から絶対に地域移行するんだという約束で移っていると、なので、これは私たちの施設が達成しなければいけないミッションなんだと、使命なんだと、忘れてはいけないというように、その送り先の施設長が3代変わられていく中で、変わるたびに、この方は地域移行するんだということを引き継がれて、11年経ってようやくそれが達成できた。その11年経って、その施設に電話がかかってきて、それで、あの時の約束がようやく果たされたということで連絡をいただいて、飛んで行くわけです。そうすると、当時、この方のいろいろな支援を考えてくれた職員さんが、一緒に地域移行した職員さんが3代目の施設長さんになられていて、その方にお会いして大変嬉しかったと、そんな話を聞いたわけでございます。

国としても、こちらのスライドにあるように、真剣に成果目標を立てて、この問題を何とかしようと、それから現場の方々も、命がけでこうした取組を進めていらっしゃる人たちがいるということで、今日の話の内容は、こうした人たちの想いとか実践を、本当に少しなんですけれども、本来であれば施設の担当者の方から直接お話していただいたほうがいいとも思うんですが、少し、ご紹介させていただくということになります。それが2つ目の全国の素晴らしい実践の経験からということになります。

こちらは、後でまた最後のほう、ちょっと出てくるんですが、今日は私の研究について少しご紹介をさせていただけるということで、どういう方法論の下に研究を進めているかといいますと、少し難しいので、また後でご紹介しますが、ちょっと長いんですが、プログラム理論・エビデンス・実践間の円環的対話による効果的プログラムモデル形成のためのアプローチ法、これを使って、いろいろな効果的な支援モデルをつくらうという、そういう方法論でございます。ここが今日のところで、様々な知的障害のある方の地域移行支援に取り組む現場の方は、本当に驚くような様々な工夫を日々凝らして、実践されているわけでございます。制度の中で、あるいは制度をはみ出してですね。そういった実践を基にして、プログラムの設計図というんですかね、プログラムの設計図をつくと。設計図をつくったら、それが本当に有効なものなのかを、研究をとおして確認すると。研究をとおして確認したエビデンスを現場の方にお戻して、現場の方がまた実践を、新たな実践を生み出すと、それをぐるぐる回していきながらいいモデルをつくっていくと、そういう方法論、現場の方と一緒にやらせていただく方法論なわけでございます。

その中で、今、研究がどこまで進んでいるかといいますと、まずはいろいろな、そんなに多くはないんですが、この分野の先行研究と論文等ございますから、それをちょっと調査させていただいて、

仮説のモデルをつくった後に、このように現場のほうに、全国16法人なんですけど、インタビュー調査に行かせていただきまして、東北から南はどこまでだったかな、九州まで行かせていただきまして、いろいろな実践を理解してきたわけでございます。その後、少しまとめさせていただいて、アンケート調査となるんですが、この赤になっているところが今日の話のメインで、こんな話を聞いてきましたということをご紹介させていただくと、そういうことになるわけでございます。

インタビューでお伺いしたことの大きなカテゴリーはこんな感じになっておりまして、まず、地域移行支援について、どういう想いで、どういうゴールとかミッションを持ちながら、皆さんはこの取組に参加されているんでしょうかと、そういうことをお伺いして、その後は、それぞれご利用者様に対してはどんな働きかけを、ご家族に対しては、地域に対しては、支援職員に対してはどうでしょうかと、こういうことをお伺いしてきたわけでございます。

それぞれについてお話をさせていただくということになります。若干、ここからお話しさせていただく内容で、いやちょっと、私と考え方が違うとか、そういうこともあるかもしれないですね。それはディスカッションすべきことだと、今日はできないですけども、今日はできないんですが、それぞれお考えを持ってディスカッションすべきことだと思いますので、少し、この取組に携わっていらっしゃる方、あるいは関心のある方は、自分の考えと同じかな、違うかなっていうことをちょっと意識していただきながら、聞いていただければいいのかなと思ったりします。

まず、私たち、地域移行に関わる私たちのミッションって何なのかと言われた時に、非常に印象に残った言葉の1つが、奪われてきた経験を取り戻すことなんだと、そういうことをおっしゃっております。本人もそうだし、ご本人もそうですし、入所されているご本人もそうですし、それからご家族にとっても選択肢がない中で、ずっとぎりぎりまで抱えて生活してきたと。だけど、やっぱり本人からすると、奪われてきた経験を早いうちから取り戻していきながら、その経験を積み重ねていくことで地域移行していくということが、非常に大事なんだというふうに語っておられました。

物すごく極端なことを、物すごく極端なことを言いますけれども、例えば、ある地域なんかだと、小学校に上がると、小学校に上がるというタイミングで、実は寮に入らなければいけないということが、随分昔はどうもあったようで、寮生活、小学校1年生の頃から、親御さんがそれまで、だから5歳、6歳ぐらいまでですよ、手塩にかけて育ててこられたお子さんなんですけど、小学校に入る時は寮に入らなければ学校に行けないということで、寮に入られるわけです、小学校1年生の時にですね。それから小学校1年生から6年生まで6年間、その後は中学、高校とありますから、さらに6年間あって、そこから入所施設のほうに移動していくわけです。今、60歳とか70歳とかになられていて、ずっと6歳の頃から集団生活が続いていて、今なお、施設、集団生活から出ていないと。これは、だから、いろいろ考えがあるとは思いますが、例えば私たちでしたら、好きな時に好きなところに行って、好きなものを食べて、好きな人と暮らすと、そういうことが行えるわけですが、そういう経験が奪われた人たちのかもしれないと。なので、私たちは、奪われてきた経験を取り戻す手助けをしていくと、それが地域移行なんだと、そんなふうに話をお伺いしたりするわけでございます。

それから2つ目に、自分たちも信念を持って取り組むと、自分たちっていうのは職員のことなんですけど、これはまたちょっと後ほど出てくるんですが、説得する側も自分なりに地域移行ということについて納得しておかないと、なかなか説得できないと。そのため、職員がみんな一生懸命に学び、体験してきたんだと、そんなことを語っているわけでございます。これはまた、後のほうに出てきますのでご紹介したいと思えます。

これが、奪われてきた経験を取り戻すとか、職員側も自分たちも信念を持って取り組むんだと、そういうことでございます。

それから、よく話題になるのは、これも、いろいろ様々なご意見があると思うんですが、常に話題になってくる、地域移行の実践で常に話題になってくることは、障害の重い人とか高齢の人とそうでない人っていうのは違うんじゃないかと、そういうようなお話も結構お伺いするわけでございます。

ただ、私が16法人回ってきた中で、大まかに、この程度のことで、このぐらいの意見では大まかに同じことをおっしゃっていたんじゃないかと思います。それが、障害の重い人とか高齢の人、それは関係ないんだと。むしろ優先して地域移行していただく人たちなんだと、そういうふうにおっしゃったわけでございます。ちょっと、皆様がどう思われるかっていうのは、逆にお伺いしたいなというところがあるんですが、障害の重い方々というのは、言葉でなかなか表現できなかったりとか、そのためにすごく生活環境が限定されがちであると。また、行動障害が重い方々なんかは、その中で物すごいストレスを受けている人たち、行動障害っていうのはストレスに対して何かを訴える形で出てくるわけでございます。だからこそ、我々の経験から言えばとおっしゃっていたんですが、我々の長い地域移行の経験から言えば、そういった方から移っていただくと、そうするとその方々の生活も安定していくと。また、ほかの利用者さんにとっても、あの人が出られたんだったら、私だって大丈夫じゃないかと、ご家族もこういうふうに思ったりするという中で、障害の重さは関係ないんだというようなことをお聞きしています。それから、本人が変わることで、これは後ほど出てくるんですが、やっぱりご家族の方の理解を得るとというのが、なかなか大変、大変というか重要なことなわけでございます。それも、ご本人が変わっていくことで、親御さんも変わらざるを得ないという部分があるんですというようなことをおっしゃっています。グループホームに入って、当事者の方がグループホームに入って、自立していく本人の姿を見たりとか、それから、時には親御さんに反抗して、自分は大丈夫なんだとそういうことを言うことによって、親御さんのほうもそうなのかと、そういうふうに思っただけということをお聞きしています。

この部分が、地域移行についてどんな価値を持って取り組んでいるのかという部分でございます。奪われてきた経験を取り戻すんだと、それから、それを支える職員自身も信念を持って取り組むんだと、それから、障害の重さは関係ないと、本人が変わることで、当初反対されていた親御さんも変わっていくんだということでございます。

それから、価値を持って、次は利用者さんにどういうふうに働きかけるのかと、ここは皆さん苦勞する部分でございます。特に、利用者さんの意思を確認すると、これをどうやってやるんだと、ここが非常に難しいわけでございます。特に、言葉で、なかなか、地域移行したいんだとか、施設にいたいんだっていうことを言えない人たち、どうしているんですかということをお聞きしたわけでございます。そうすると、先程ですね、その価値のところ、全ての人が対象なんだと話をさせていただきましたが、まず、全ての利用者さんの意思を確認すると、重度とか高齢とか関係なく、これが大前提であると。それから言葉で意思を表明できる人ばかりではないんですけれども、何かしらの方法でご自身の意思を表明していると。意思がない人というのはないんだと、そういうことをお伺いしたわけでございます。例えば、これも現場の方は、そういうふうなやり取りを、私たちは既にやっていると、周りに思われると思うんですが、周りの職員さんたちから、こんなことが、この人はこんなことがあったから、地域移行したいと思っているんじゃないだろうか、そういうふうな推測するんだと。あるいはご本人からだけではなくて、ご家族とか、それから後見人の方からもお話をお伺いするんだと、そんなことをお伺いしたわけでございます。

それからもう1つのところですね。これもかなり議論になるところだと思うんですが、私は本当にそうかもしれないと思ったことなんです、前提として意思を確認する、意思を確認するというのは非常に重要なことなんですけれども、大切なことなんです、前提として、例えば、今、入所施設といってもいろいろありますから、ユニットで過ごす暮らしやすいところもありますけれども、例えば、3人で同じ部屋をシェアしているとか、2人でシェアしているとかそういう状況もあるわけでございます。そういう状況下にあるっていうことを想定していただくと、前提条件として、その環境がいいのか悪いのかっていう話になってくると、そういうのはよくないんだと、意思確認というのは大切なんですけれども、そこに2人部屋、3人部屋、それでいいのかどうか問われた時に、そこに意思確認というのは果たして必要なだろうか、そういうことをおっしゃる法人さんもあったりするわけでございます。例えば、知らない、知らないということはないと思うんですが、知らない、家族でもな

い方と暮らしている、あるいは2人部屋、3人部屋で暮らしていると、それがご本人のニーズなんだということで、納得できるんだろうかと、そういう意見を聞くわけでございます。これはちょっと、いろいろお考えがあると思うんですが、意思を確認するっていうことは非常に重要、いろいろな工夫をしながら意思を確認する。ただし、前提として、意思を確認するかどうかっていう、そういうステージに乗らない状況っていうのもあるんじゃないかと、そういうことでございます。

それから、これも非常に重要なポイントなんですけど、体験したことがないものを選ぶことはできない、全ての利用者さんに、全てのというのがポイントなんですけど、一度は地域生活を体験してもらおうと、しかも、安心して体験してもらえるような様々な配慮のもとにということなわけでございます。これは、私たちも、食べたことのないものを提示されて、どっちが食べたいと聞かれても、いや、わからないよ、食べたことがないからと、そういうふうになると思うんですね。現場の方がおっしゃっていたのは、例えば、日帰りの見学会を始めて、1泊2日のショートステイ、それを何回かこなして、それなら2泊3日でやっていけるかもしれない、そんなふうに、あるいは、関係性のできている職員と一緒に宿泊体験を行うとか、そんないろいろな工夫をしながら体験していただく、その方がおっしゃっていたのは、体験をとおすと、やっぱり施設がいいという人っていうのはほぼいないんじゃないかと、そんなことをおっしゃったわけでございます。

それから、じゃあ入所施設、私も入所施設出身で、入所施設の方々が本当に丁寧に支援されているというのは、私も十分知っているんですね。入所施設の在り方、それは何なのか、必要ないのかというと、必ずしもそうじゃないだろうと、そんなふうに思うわけでございます。それは、入所施設にいる間にご本人のことをよく知る、いろいろ整えられた環境の中でご本人のことをよく知るという、そういう大事な時間になっていたりするわけでございます。施設への入所前からアセスメントは始まっていて、面談等をとおしながら、ふだんの生活をとおしながら、可能な限りご本人の情報を集めていくと。それが1年とか積み重なれば、それが、地域に出て行く、出て行った後も役に立つ情報になるんだと、そういうことをおっしゃったわけでございます。特に、なかなか、冒頭、別の地域の入所施設にまず帰りましたと、そういう話をさせていただいたんですが、一旦、福祉に繋がらないと、いろいろなところとネットワークが築けないというようなこともあったりするわけでございます。ですので、一旦、入所施設に入って、その中でいろいろなところと福祉サービスのネットワークを繋いだりとか、いろんな人と会話を繋いだりとかして行って、地域生活がしやすくなっていくと、そういうことも入所施設の1つの役割なんじゃないかということをおっしゃっていたわけでございます。

それでは、これは難しいとは思いますが、必要であれば期限を定めないフォローアップ支援を行うと。やっぱり不安なのは、入所施設から出てしまうと、この支援者さんとの関係が途切れてしまうんじゃないかと、ずっと私のことを支えてくれたこの施設のスタッフさんとの関係が途切れてしまうんじゃないかと、そういうことが不安なわけですが、移行者全員のフォローアップは続けていると、これは16法人全てではなかったんですが、中には、フォローアップを続けているんだと。例えば、15年前にグループホームに移った人のことも、今でも把握しているんだと。それで何かあれば飛んで行くと、それがうちの地域移行なんですというようなことをおっしゃった施設さんもあったわけでございます。

ここまでの、まず施設としてどういう価値を持っているのかと、そしてその価値の下に、利用者さんに対してどんな働きかけをしていくのかということをお話しされたわけでございます。

それでは3つ目に、やっぱり地域生活移行を決断して、それを進めていくのは利用者さん本人なわけでございますが、ただやっぱり、家族の方の不安というのはかなり大きいわけですね。ご本人もご家族の応援がないと、あるいは支えがないと、入所施設からなかなか出るということを決断できない、そういうこともあるわけでございます。そこで、どの施設さんも、ご家族への働きかけというのは、かなり丁寧に、一生懸命されているわけでございます。1つは、家族にも見ていただくと。やっぱり見ていないものは、なかなか、ご本人が体験していないものは選べないっていうのと同じように、見ていないものはなかなか安心できないということで、ご本人のグループホーム等、体験している様子



を、もちろんご本人に許可を取ってですが、例えば、今ご高齢のご家族の方、結構いらっしゃいますから、グループホームまで見に来てくださいますと言っても、しかも同じエリアに住んでいなかったりするわけで、見に来られないわけですね。なので、今だったらZ o o mとかもありますから、Z o o mとかを繋いで、お話を直接お伺いするとかそういうこともできるわけで、ビデオを撮影したりしながら、その様子を見ていただくということが大事なんだということでございます。

それから、ご家族への安心感の提供も大切ということで、当然、繰り返し、こういうサービスがありますということを説明する、実際の様子も見ていただいて、施設からの支援がなくなるわけではないことを丁寧に説明するというをお話しさせていただきました。

ご家族の方の抵抗っていうのは、多くの場合、何か最近、若いご家族はそうでもないという話をお聞きするんですが、せつかくここで、ここでというのは入所施設なんですけど、せつかくここで終の住処を手に入れたと思ったのに、どうして出なければいけないんだと、もし、出て何かあったらどうするんだというような不安もあるわけでございます。高齢になられて、介護といってもなかなか難しいと、そういう状況もあるわけでございます。その時に、施設側の殺し文句は、もし何かあったら、ちゃんと戻れますので大丈夫ですというふうに、こういうふうにするんだと、これは殺し文句だというようなことをおっしゃっていました。大丈夫なんですかっていうふうにお聞きしたら、それで戻って来た人は1人もいませんというようなことを言っていたんですね。なので、大丈夫ですと、安心してくださいますということをしっかり言う、それが大事なんだということをおっしゃったわけでございます。

それから、ご家族との関係性、施設の関係性も非常に大事にされていまして、ご家族の想いに応える形で、いろんな勉強会を行うこともありますし、それから多くの場合、親の会っていうものがあつたりするわけなので、今何をしたいのか、何を求めているのかということをお互い議論しながら、年間計画を立てて進めていくんだと。その中で、例えば、親亡き後のことをどうするんだというようなことを一緒に学習したりとか、そういうことについて応えていくことによって、ご家族との信頼関係が生まれていくんだと、そんな話をお伺いしています。

それから、最終的にご家族がよしと、これで大丈夫だと思えるきっかけに、大きいきっかけになるのは、ご家族同士の会話だというようなこともおっしゃっていました。例えば、長年ずっと入所施設で暮らされているわけで、ご家族同士のやり取りというのは結構あつたりするわけでございます。その時に、Aさんが施設から出て地域で生活しているということをお聞きしたら、当然、どうだったの、やっぱり大変でしょうということをお聞きするわけなんです。その時に、そのご家族が、Aさんのご家族が、いやいや、それが意外と本人が喜んでいてよと、私も不安だったけどと、そういったやり取りが自然にあつて、それが実は、施設側が幾ら説明してもなかなか難しいんですが、見えないところでご家族を説得するきっかけになっていたんだと、そういうことをお話しされたわけでございます。ここまですごいご家族でございます。

ご本人とご家族と、非常に重要なんですが、多くの場合、入所施設を出て生活するとなると、地域のほうに受け入れる先がないので、だから難しいんですけど、そういう話があつたりするわけでございます。そのための取組も非常に重要なわけなんです。それはどうやってやっているんですかということをお伺いすると、地域の状況を積極的に把握するんだと、ここにもございますが、例えば、世話人の人柄までというのは、なかなか中に入って見なければわからないわけでございますが、どういう建物、新しいグループホームができたとか、そういうことをお聞きしたら、外観を見に行つて、どういう建物なんだろうかと、もしうちの利用者さんがここで生活することになった時にどうなんだろうかと、支援体制はどうなんだろうかと、医療機関への通院は同行してもらえるんだろうかと、2階建てだけれども、身体介助が必要な方は大丈夫だろうかと、土日は帰宅しなきゃいけないグループホームなんだろうかと、昼食の支度はしてくれるんだろうかと、金銭管理はどうなんだろうかと、わかることをしっかり施設の側で把握しておく。さらに、把握したものについてマッピングをして、それぞれ、このグループホームの特徴はこういうところなんですということを記載して、そういうものを施設として持つておくということが重要なことなんですというようにお伺いしています。

それでは、丁寧なフォローアップ支援をすることで協力機関が増えていくということで、先程、期限を定めないフォローアップをするんだという話がありましたが、それは結構、グループホームを運営されている機関さん同士で話題になったりするわけですね。あそこの施設から来られた方は、こういう困り事があった時にちゃんと対応してくれるよということがわかって、だったら、今うちのグループホームに1枠、2枠あるけれども、あそこの施設さんから来てもらえないかなということに繋がっていくということで、先程の無期限のフォローアップというのは、実は、移行した後も無責任なことはしないと評判になって、地域との関係性を結んでくれるんだと、そんなことをお伺いしているわけでございます。

後は、これもよく聞くんですが、グループホームを建てますとか、そういう時に、地域の方が賛成したり反対したりと。私も、そもそも地域の方の了解って得なくちゃいけないのという、思うんですけど、思うんですけども、後々のことを考えれば、それは賛成してくれているほうがいいわけであって、その時、実は大賛成っていう人、地域の方、あるいは大反対っていう地域の方というのは、どっちもそんなに、そんなになくて、どっちでもという方が多かたりするわけです。その真ん中の方たちにちゃんと賛成をしてもらえるように、地域と提携していったりとか、普段からそういったやり取りをしていくというのが大切なんだということをお伺いしているわけでございます。ここまです、地域に対して施設が働きかけるということでございます。

最後、支援者ですね。支援者を対象にした働きかけについて、これは、私もお伺いして、そうなんだと思ったんですが、当時は支援職員の中にも、ご本人の地域生活をしたいと言っていないじゃないかと、なかなか自分の言葉でお話しできない方だったんですが、直接、施設を出たいんだと、こういうふうに言っていないじゃないかということで、本人が言っていない中で地域生活を進めていくっていうのは、自己決定と言えるのかということが、施設の中で、当初、本当、地域生活、地域移行を始めた当初、大論争になったりするわけです。利用者さんのことを思うからこそ、言っていないじゃないかということが大論争になっていくわけです。本人、意思表示していないし、何でなんだと。その答えを探すのに、この施設さん、法人さんは、1年かかったと。今、結論から言うと、これも議論の必要なことなんだと思うんですが、結論から言うと、今、それが確信になっていて、知的障害のある方の自己決定といった時に、これは知的障害があるとかないとか関係ないと思うんですが、体験したことのないことは選択肢に入らないと。それを体験したら、多くの場合、地域生活を選ぶ人たちがいるんだというようなことをおっしゃったわけでございます。なので、当初は支援者もすごく悩むわけですけども、今は確信を持って、自信を持ってそれを進めていくことができるんですということ言っていっちゃいました。それから、支援職員も、やはり確信を持つためには、一度は経験しなければいけないということで、2、3人ぐらいずつ一緒に泊まって、そういうことができれば、入所施設の方も一緒に泊まって、どういうものなのかということと一緒に体験すると。ある施設さんでは、地域生活移行した利用者さんにフォローアップの訪問に行くわけですけども、1年後、どうかなというようなことを見に行くわけですが、その時に、必ず新人職員を連れて行くんだと、新人職員を連れて訪問して行くことで、その新人職員なりに、施設を出て地域で生活するっていうことの意味は一体何なんだろうかと、入所施設でそのためにできる支援って何なんだろうかとということを考えていただくんですというような話をされてきました。

最後、継続的な勉強の機会を持つということで、これは非常にいい取組だと思ったんですが、法人の中に新人育成委員会という委員会、スタッフの委員会組織をつくって、みんなで研修を企画して実行したりとか、その後、今はちょっとコロナ禍でなかなかできないんですが、お疲れ様会をやったりしていく中で、職員間の繋がりとか価値の共有っていうのを図っていく。あるいはグループホーム、私もこれは経験があるんですが、私、2年半グループホームの世話人をやっていた、2年半でしたかね。当時ケアホームと言われるような、非常に重度の方を対象にしたグループホームだったんですね。重度と言っても、身体的に介護が必要というよりは、行動障害の重い方々と一緒に生活していたんですが、当時の勤務形態が、月曜日の3時に出勤して行って、お泊まりして翌朝9時に通所

の施設のほうにお送りして、またその日の3時に出勤してと、それを月曜日から金曜日まで繰り返すって、それを2年半やっていたんですけども、かなり孤独なんですよね。施設であればスーパーバイザーの先輩がいて、困った時、どうなんでしょうかと聞けるわけですけども、1人職場だったりするもので、なかなかそれもできないということで、グループホームの職員さんというのはそうなりがちなので、施設のほうから、入所施設のほうから巡回して、夜、巡回して、職員さんの話を聞いたりとか、孤独の状況をなくすというようなことをお話しされていたわけでございます。本当に効果的な、効果的というか、全国の先進的な16法人からいろいろ見学をさせていただいて、お話をお伺いさせていただいたんですが、ゴール・ミッションとして、こんなことを、価値を大事にしていたんだとか、利用者さんに対してこんな丁寧な働きかけを、家族に対して、地域に対してこんな丁寧な働きかけをしていて、こんなふうに支援職員をスキルアップをさせていたんだというようなことをお伺いしてきたわけでございます。

ここまでが、ちょっとうまく伝えられなかったような気もするんですけども、全国の16法人から私がお聞きしてきた素晴らしい創意工夫の取組の一端だったわけでございます。こういった、ここからが、ちょっとおまけみたいなのところもあるんですが、効果的な支援モデル、今日は支援モデルということなんですけど、こういった、ここに書いてあるようないろいろな事例をお伺いして、今日は自立支援協議会と、自立支援協議会というか協議会でございますが、この協議会の中で、こうした優良な実践をみんなでシェアして学び合うということは結構あるんじゃないかと想像しますし、あるいは協議会という形でなくても、いくつかの施設さんが集まって、ちょっと大きい法人さんであれば、その中でこういった事例発表をして、ああそうなんだ、そういうことを大事にしていたんだとか、そういう工夫をするんだということを学び合うという機会っていうのは、少なくないんじゃないかなと、そんなふうに想像するわけでございます。

それから、ちょっと進めば、こういうものが1冊の冊子とかになって、事例集みたいなの形でつくられていて、法人さんの財産になっていたりとか、あるいはホームページ上で公開されていたりとか、そんなことがあるんじゃないかと思えます。

ここからは、若干の私からの投げかけみたいなのところもあるんですが、こうしたことを越えて、協議会が主導して、あるいは今日ご参加いただいている皆様と協働して、大きな社会課題を解決する取組を進めていくというのは、1つはこういうやり方んじゃないかということをご提案させていただくわけでございます。

ご提案させていただく、ちょっと、問題提起させていただくに当たって、IPS、援助付き雇用というものを、若干説明させていただきたいと思えます。ちょっと、精神障害のある方の支援に関わられている方は、今日ご参加の皆様の中でどれぐらいいらっしゃるかわからないんですが、このIPS、援助付き雇用っていうのは、「Individual Placement and Support」というものの略、個別就労支援ですね、個別的な援助を行う就労支援というものの略でございます。これは、精神障害のある方の一般就労を目指すプログラムとして、かなり強力なプログラムであることが全世界的に立証されているものでございます。その特徴は、このスライドにある8つでございまして、1つは競争的雇用に焦点を当てるんだと、それから、仕事探しをいつ始めるのかはクライアントの選択に基づいている、それから、リハビリテーションと精神保健サービスの統合とか、ここに書いてある8つのことがIPSの特徴なわけでございます。特にわかりやすい特徴のところでございますと、仕事探しをいつ始めるのかっていうのは、クライアントの選択に基づく、例えば、これも議論があると思うんですが、障害のある方のお仕事探しを支援する時に、就労準備性を見ると、朝ちゃんと起きられるかなとか、ちゃんと身支度整えられるかなとか、お薬をちゃんと飲んでいるかなとかそういうことを見るわけですけども、IPSの場合は、それよりもむしろ、クライアントご本人が働きたいと言ったタイミングなんだということを言っていたりするわけでございます。それから、クライアントの好みを尊重するの部分でも、よくあるのが、あなたは人付き合いが苦手だからオフィス系がいいよねとか、細かい作業が苦手だからサービス系がいいねと、こういうふうに、できること、

できないことでお仕事探しをするというようなことがあるわけですが、IPSの場合はそうではなくて、何がやりたいのかと、ご本人がどんな仕事がしたいのかということを中心とすると。それから迅速な職探し、これは長い訓練の期間を設けないと、可能な限り早期に就労を実現し、後は働きながら学ぶというのがIPSの特徴でございます。それから、無期限の個別支援を行うと。今、申し上げたようなところが、従来型というか多くの就労支援の実践とちょっと違っていたりするわけでございます。

それもちょっとここから、若干難しい話になるんですが、ランダム化比較、RCTと書いてあるのは、ランダム化比較試験、「Randomized Controlled Trial」の略なんですが、この黒いところが、ニューハンプシャーとかニューヨークとかというアメリカの州だったりするんですが、黒いところはIPS型で支援した場合の就労率ですね。グレーのところは従来型、従来型っていうのはトレーニング中心の就労支援。就労準備性をそれなりの訓練期間において、就労準備性を整えてから就職していただくというモデルなんですが、比較した時に、それぞれ全然違ったりするわけですが、全体として2.4倍以上ありそうな気もするんですが、全体として2.4倍、IPS型の就労支援のほうが就労率が高いと。実は就労定着率もそうなんですけれども、それからご本人の満足度もそうなんです、高いということが、全世界でこういう実験が行われていて、そうだとすることがどこの国でもどこの地域でも立証されているモデルでございます。今日、ちょっとお示していないんですが、日本でも同じような研究がされていて、日本の精神障害のある方でも、IPS型の支援の場合はおおよそこういう結果であるということが言われているわけです。

そのため、このように成果が全然違うんだということがわかっているわけなので、8つの原則に基づくIPSの支援を、「Evidence-Based Practice」というわけでございます。日本語では、科学的根拠に基づく実践ということになります。この手の科学的根拠に基づく実践は、実は、正しく実施するということが非常に難しいというわけでございます。例えば、何か病気、今、コロナウイルスが流行っていて、発症を抑えるためにワクチンを打つというそういう介入があるわけなんですけれども、それはそんなに難しくなくて、いや、もちろん私は医師免許とか持っていないからできないんですけど、基本的には注射針を刺して、薬を打ち込むという介入ですので、資格さえあれば、それでもミスが起こったりしていますけれども、おおよそ、間違わずに介入することができるわけでございます。ただ一方で、このIPS型の支援、こういった社会プログラムの場合は、私はIPSをやっているよといっても、実はそのIPSと全然違う実践がされていたりとか、そんなことが往々にして起こるわけでございます。そのため、IPSをはじめとしたEBPと呼ばれるようなプログラムっていうのは、こうしたIPSを正しく実施するためのチェックリストを持っているわけでございます。このチェックリストは、IPSが忠実に実施されているかどうかを測定するものということで、忠実性を意味するフィデリティという名称がついているわけでございます。

例えば、IPSの場合は、こういったお1人お1人に寄り添った丁寧な支援をするわけなので、1人のスタッフさんがたくさんケースを抱えているっていう状況では、IPSはやりづらいわけですね。なので、ここでは1人のスタッフさんに対して、一体、何人の利用者さんが担当になっていますかということをお聞きしているわけです。20人以下であれば5点ですと、5点満点ですと。IPSの実践に近いですと、そういうことが言えるわけです。これは就労移行支援事業所であれば、この基準というのは結構満たされているわけございまして、多くの場合5点が付くと。就労移行支援の場合は。

一方で、IPSのほうは、こういった迅速な職探しをするんだと、そういうことも位置付けているわけでございます。例えば、その部分に関するフィデリティ尺度を見てみると、雇用担当窓口との利用者さんとの最初の接触、これは平均してどれぐらいですかということをお聞きしています。うちの事業所は、ちょっとこれは、すごくとんでもなく早いと思うんですが、1か月未満ですと、1か月未満で平均して最初の求職活動が始まりますということであれば、かなりIPSに近い、完全にIPSに近い実践であるということなので5点、一方で、全体として9か月以上かかっていますということであれば、ここも早期に迅速に職探しをするという原則とちょっと離れているということなので、この部分は1点ですと、そういうふうになっているわけでございます。これについては、就労移行支援事業所、な

かなか、標準利用期間が2年間ですから、この1か月でというのは相当ない、あまりないと思うんですね。それでいうと、全国の就労移行支援事業所とIPSがどれぐらい近い実践なんだろうかということ調べれば、おおよそ、この部分については低い得点になると、そういうふうなことになるわけでございます。

これが、ちょっと改めてなんですけど、私の研究方法論って何だったかという、全国の優良な実践、16法人の優良な実践からその工夫とか価値というものをしっかり聞き取って、把握して、それを基にプログラムをつくる、さっきのIPSの8つの原則みたいなものですね。プログラムをつくったら、それが本当に効果に繋がっているのかどうかを調べる、それを現場の方にお戻しして、現場の方と一緒に良いものをつくっていくというのが、私の研究方法論でございました。

ここからは、ちょっと難しくなってしまうので、さっといくんですが、このように全国16法人、お話を伺ってきた中で、このプログラムというのはこういうことが目指されるんだねというのを図にしたものが、これでございます。ご家族の変化としては、ご家族が前向きな認識になって、ご家族とご本人の認識が一致してサポートしてくれるようになればいいねと、利用者さん本人については、利用者さん本人がいろいろな体験をとおして、自信がついて、ちょっと地域に出てみたいなどと思ってもらえて、スタートできればいいねと、地域のほうも、このようなバックアップ的役割を担うような仕組みが整えられたりとかして、ここに至っていくと、こういうことが目指されればいいねということ、16法人からいろいろお聞きしてつくったわけでございます。これが、このプログラムの成果の流れです。

そのために、じゃあ、一体何をするのかというのを書いたのがこちらになります。利用者さん本人への働きかけというところでは、先程もずっとありましたが、ちゃんとニーズを、全員対象にニーズを確認するんですと。それから、体験していないものというのはやっぱりわからないので、体験してもらおうなんですと。その体験した結果からまたニーズを判断するんですとか、地域の中に必要な資源をつくっていくんですということが、流れで書いてあるわけでございます。ご家族に対しても、殺し文句は、何かあったら戻って来られるから、そういうことなわけでございますが、しっかり説明をして安心をしていただくんだと、グループホームというのは様子を見てもらうんだというようなことが書かれています。地域のほうも、地域のアセスメントから始まって、フォローアップまでこういうふうの流れでいくんだと。こういうふうにならなければ、こういった成果がちゃんとこうやって起きるんですということを、法人の見学とかインタビューをとおして、整理させていただいたわけでございます。

また、こうした活動を、どういう組織、入所施設単体ではできませんから、どういった組織でやっていくのかとなった時に、最初は入所施設のほうで支援が展開されて、その後、グループホームのほうに支援の拠点が移っていくんですとか、あるいはそれを支えていくような相談支援事業所の役割があったり、あるいはグループホームを支えるセンター的な役割っていうのが重要でございまして、先程、孤独になりがちだっていう話があったんですが、グループホームを支えるようなセンター的な機能を持つんですというようなことが整理されているわけでございます。その根底には、奪われてきた経験を取り戻すのが私たちの地域移行なんだというような、価値があるんだということが、構図になっているわけでございます。

じゃあ、これをぽんと渡されて、じゃあこのとおりに支援しましょうと、これもなかなか難しいと思うんですね。重要なのは、このニーズの確認って一体どうやってやるのと、体験機会というのはどうやってやったらいいの、そういうことだと思うんです。なので、次のページですね。小さくて、この画面も全然見えないと思うんですが、お手元の資料だったら若干見えるかもしれません。そういったものが左側に、効果的な援助要素ということで書かれていて、A領域、B領域、C領域、D領域とこういうふうになっているわけでございます。例えば、A領域のA-1項目は、支援組織として共有しておくべき理念ということで、ちょっと小さくて、私も目があまりよくないので読めないんですけど、こっちを見ればいいのか。例えば、入所施設は生涯の住まいではなく、利用者はいずれ地域移行

することが望ましいということが組織の共通認識になっているとか、いくつかチェックボックスがあって、うちの施設はできているな、できているなど、こういうふうにチェックができるわけでございます。これは、ここはちょっとわかりにくいんですが、これが組織のこと、B領域っていうのが、ご本人のことなんです。なので、ちょっとお手元の資料はこのページを写していただきながら、スライドも両方見てほしいんですが、B-1項目の地域移行に向けての準備支援というのは、ここを具体的にどうやってやるのかということをチェックボックス形式で示したものの。その次の、地域移行に向けてのニーズ確認というのは、ここを具体的にどうやるのかということを一覧化したものというように、1つ1つのボックスごとに、こういったものが用意されていて、このプログラムの中ではこうやってやるんだということを書いているわけでございます。そして、これがどこからできているのかと言うと、先程、ご紹介させていただいた現場の方のご経験、あるいは考えなわけでございます。

これを、IPSのこういった尺度と同じように尺度化したものが、次のこちらになります。これはB-3項目の地域生活を体験する機会の提供とアセスメントという部分で、つまり、先程の図で言うと、この部分をどうやってやるのかということを示したものになります。こちら、見ていただきますと、ここに、全ての利用者が地域生活体験の対象になるんだと、どんな状況にあっても、最初から地域生活体験は不必要と決めつけずに地域生活の体験を支援するんだとか、大切にしたいことが、ずっと、こうやって書いてあるわけでございます。ここまでだあっとこう書いてあって、1つ1つチェックを入れていって、右側、1点から5点になっていますので、示された要素のいずれにも、いずれにもチェックが入らない場合は1点であると。こちらですね、赤く囲っていますが、示された要素、これが全部で10いくつかあるんですが、16要素、全部16個チェックがついて、なおかつ、dとかcとかaとかbとか書いてあるんですが、このa、b、c、d全てに対して、2項目チェックが入れば4点ですというようなことが、チェックできるようになっているわけでございます。こういった尺度が全項目分、それぞれ1点から5点、1点から5点とあるわけですので、全部が5点あるいは4点あたりであれば、このとおりに実践ができているんだということを示せるわけでございます。ですので、忠実性を意味するフィデリティという言葉を使っているということになります。これはIPSなんかと同じでございます。

今、この研究の場合は、ここまでは実はできているんですね。なので資料としてお載せすれば良かったなと思ったんですが、ちょっと一部分しか掲載していないんですけども、これが本当に効果に繋がるかどうかということが重要なわけでございます。ですので、次の段階としましては、このフィデリティ尺度と、活動の実施度を表すフィデリティ尺度と、それから、実際の地域移行等が達成したのかとか、ご本人の想いはどうなのかという成果の部分、両方アンケートに取らせていただいて、その分析を、これはちょっと違うプログラムなんですけど、このように、ここは1点から5点で全部なっていますので、ちょっとこの詳細な説明は避けたいと思うんですが、これは相関分析という分析で、ここの数字のところマイナス1から1を取るんですね。プラス1に近ければ近いほど、この活動がちゃんと成果に結びついていたということ、統計を使って示せるわけでございます。それをしっかりやって、16法人の皆様と一緒にやってきたこのプログラムが、本当に、ここに描いたような効果に繋がるものなのかどうかを確認するというのが、次の研究になるわけでございます。

あと、最後なんですけど、まとめということで、一方で、こちらの私たちが取り組んできた研究というのは、いかに入所施設の中で体験をしてもらうとか、ご家族にお話をするとかという、丁寧な地域移行支援をするのかということに焦点を置いたプログラムづくりだったわけでございます。一方で、それは重要なんですけど、大きな法人さんが、自法人の中にグループホームをたくさんつくって、地域生活を達成していくという方法の限界も一方であるんだというようなことを、現場の方から聞いております。ですので、次の展開としましては、先程の効果検証とともに、相談支援事業所や、あるいは入所施設でない支援機関がグループホームをつくって、地域生活を応援していくという、こちら側の、こちら側のモデルづくりっていうのも重要であろうということでございます。

最後になります。こちらが、最後は、ここまでどういう話だったかといいますと、なぜ地域移行な

のかということをお話しさせていただいて、皆様と問題意識を共有させていただいて、その上で全国の素晴らしい実践ってというのはどんなことを大切に、どんな実践をされていたんだろうかということをお話しさせていただいて、3つ目に、そういったものから、事例集という形ではなくて、プログラムをつくるってというのは一体どういうことなのかということの提案をさせていただいて、最後になるわけでございます。これは私から地域自立支援協議会に期待したいことということでございまして、本日のテーマも、本人中心の暮らしはこうして実現すると、そういうテーマでございました。こちらの協議会の活動方針も、当事者の視点に立って地域課題を解決、間違えた、地域課題を検討すると、これが、今年度のテーマと聞いています。地域のこうした障害福祉のシステムづくり、あるいは本人中心の暮らしを実現するというに当たって、地域課題は山積しているというように認識しています。今日はたまたま、たまたまではないですけれども、地域移行支援が課題だったわけですが、そのほかにも、情報保障の問題、あるいは高齢障害のある方の問題、コロナ対応の問題、ヤングケアラーの問題、それから、福祉人材確保の問題、山積しているわけでございます。スライドに示しているのは、地域自立支援協議会に求められる機能として、テキストで示されている、説明されているものでございます。

まずは、課題について情報を収集し、地域の困難事例等を把握し、既存のネットワークや資源を使って対応を協議し調整すると。さらに、それでも有効な支援がない場合は、ここからが私の問題提起なんです。この研究でつくっているように、あるいはIPSがそうしてきたように、自立支援協議会が主導して効果的なプログラムをつくと。都内で行われている先進的な取組ってというのは、たくさんあるはずなんです。そういうものから先駆的な実践を集め、しっかり設計図を描き、フィデリティ尺度をつくるまでいくかどうかはわかりませんが、誰でも模倣できるようなプログラムの形に整え、必要であれば、効果を検証して制度化を目指し、お金をちゃんとつけて地域課題の解決に向かうと。それが、自立支援協議会が担うべき役割、今日お集まりの皆様、ある程度、どのような形で貢献していただいて、一緒に課題解決を目指す取組なんじゃないかということ、最後、問題提起させていただいて、私の報告は、拙い報告だったんですけれども、終わりにしたいと思います。参考文献はこちらになります。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

(司会) 新藤健太さん、ありがとうございました。

それでは、ここで、15分間の休憩といたします。

第2部、パネルディスカッションは14時45分に開始いたします。

## パネルディスカッション

### 「地域移行、私の想いは伝わった？」

(司会) お待たせいたしました。それでは、第2部を開始いたします。

第2部は、「地域移行、私の想いは伝わった？」をテーマに、パネルディスカッションを行います。パネリスト、コメンテーター及びコーディネーターの皆様をご紹介します。

まずステージの左側、4名のパネリストになります。右から、社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会杉並育成園すだちの里すぎなみ利用者、杉並区障害者地域相談支援センター高円寺（すまいる高円寺）非常勤職員事務補助、上田久美子さんです。

(拍手)

(司会) 社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会杉並育成園すだちの里すぎなみ副施設長、二宮史子さんです。

(拍手)

(司会) 元入院患者、柳沢陽子さんです。

(拍手)

(司会) 社会福祉法人ひらいるミナル相談支援センターくらふと主任相談支援専門員、古橋陽介さんです。

(拍手)

(司会) 続きまして、ステージの右側、コメンテーター及びコーディネーターです。左から、コメンテーター、群馬医療福祉大学社会福祉学部講師新藤健太さんです。

(拍手)

(司会) コーディネーター、東京都自立支援協議会会長、武蔵野大学人間科学部人間科学科教授岩本操さんです。

(拍手)

(司会) では、ここからのパネルディスカッションの進行は、岩本会長にお願いいたします。

(岩本) 皆様、こんにちは。本日は、セミナーにお越しいただきまして、ありがとうございます。

第1部の新藤先生のお話を受けまして、第2部ではパネルディスカッションを行います。4名のパネラーの方にご登壇いただきまして、「地域移行、私の想いは伝わった？」というテーマでお話していただきます。

この協議会は、冒頭の所長からのご挨拶にもございましたけれども、前期の第6期から、「当事者とともに」ということを大きなテーマにしており、今年度は、「当事者の視点に立って地域課題を検討する」というテーマでございます。やはり、当事者が経験していること、当事者の方が感じていること、そういった声を受けて、私たちは何ができるだろうかということを考えたい、そういう原点に立ち戻れることを、協議会としても意識して活動しているところでございます。地域課題は、本当に新藤先生がおっしゃったように山積しております。その中で、今回は地域移行を取り上げ、ご本人たちがどのような経験のプロセスを経ていらっしゃるのか、その言葉をお聞きしたいと思います。先程、新藤先生から、施設のグッドプラクティスを私たちが学んで展開していくというお話がありましたが、ここでは、2名の当事者の方、そして支援者の方のお話を聞きながら、その経験から私たちは何かを学ばせていただきたいと思います。このパネルディスカッションを設定したところでございます。今日は上田さん、二宮さん、柳沢さん、古橋さん、2チーム4名の方にお話しいただきます。最初に上田さん、二宮さんお2人で、20分ほどお話をさせていただきたいと思います。

それでは、上田さん、二宮さん、どうぞよろしくお願いたします。

(上田) こんにちは。上田久美子です。よろしくお願いたします。

(二宮) こんにちは。すだちの里の二宮と申します。よろしくお願いたします。

今日、朝5時から起きていらっしやって、とても緊張している空気がびしびし伝わってくるんです



けれども、上田さんの想いがしっかり伝わるように、資料を作成したり、準備をしてきました。これから一緒にお話ししていこうと思っています。よろしくをお願いします。

それでは改めて、上田さん、自己紹介からお願いします。

(上田) 私の名前は上田久美子です。44歳です。

好きなこと、音楽で、ドラムを叩くことです。始めは見ていただけだったけど、自分がやりたかったです。ドラムを叩くと、叩くことで、音楽の楽しみがすごくわかったからです。だから好きになりました。

好きなことは、お金を貯めて下見をしてから、電気の家電を買いに行くことです。へそくりを貯めて必要なものを買いに行きます。貯金も貯めてから、必要なものを買いに行きたいです。節約も少しずつ練習をしていきたいと思います。買物は知り合いの人と一緒に出かけたいと思っています。自分で美容院に行って髪の毛を染めています。身だしなみを、少しおしゃれをしたいからです。人に恥ずかしく見せたくないし、人に恥ずかしくないように、1人で髪の毛をカットしに行っています。

(二宮) はい、ありがとうございます。緊張、今のうち、深呼吸をしておいてくださいね。

今、目の前に映っているスライドは、ご本人の希望で、ちょっとお手持ちの資料にはない、ご本人のプロフィールというふうになっています。先天的に慢性腎炎の病気があって、小さな頃から病院に入院することも多かったと聞いています。学校卒業後、青森県のある施設へ入所されました。友人の皆さんとバンドを組んで、ドラムを担当していたんですよ。

(上田) はい。

(二宮) そして大の家電好きでもあります。へそくりということもありましたけれども、お金を貯めて布団クリーナーを購入したり、時々、家電量販店とか家電を見に行っているというふうに従っています。

私自身は平成19年からすだちの里で働き始めまして、地域移行支援に携わせていただいています。上田さんとはかれこれ10年を越えるお付き合いになってきました。では、ちょっとだけ、今、上田さんが生活しているすだちの里はどんなところなのかも紹介したいと思います。

すだちの里は、平成18年に開所をした地域移行型の障害者支援施設です。施設入所支援は定員50名で、男性が30名、女性が20名入所されています。日中支援は生活介護、自立訓練、就労移行支援の3つのサービスを提供しています。下の米印のところに、一体型の利用、体験型の利用というふうに書いてありますけれども、サービスの利用形態は様々でして、すだちの里では3つの利用のパターンがあります。

1つ目は、すだちの里に住みながら、すだちの里の日中活動を利用されている方。2つ目は、すだちの里に住みながら、杉並区内の日中の事業所へ通所されている方。杉並区内の4つぐらいの事業所に、約15名の方が平日、毎朝通所をされています。3つ目はグループホームや自宅から通所して、すだちの里の日中活動のみを利用されている方です。日中支援と夜間支援が、ご本人の希望によって、サービスの選択ができるようになっています。杉並区所管の方は、地域移行を目的とした移動支援も、時間も支給されます。毎日利用者の方も通所や外出、ヘルパーさんのお出かけ、そして特定相談支援事業所、成年後見人さん、様々な人の出入りがあって、とても人の出入りの多い風通しの良い施設となっています。

居室は1人1人個室となっていて、1つのユニットには4名から7名の方が住んでいます。ユニットにはリビング、キッチン、トイレ、お風呂がそろっています。すだちの里は入所施設でありながら、グループホームを想定した生活体験をすることができます。開所からこれまでに約90名の方が卒業されて、グループホームに移行されました。中には、単身生活に移行された方もいらっしゃいます。地域で自分の生活を始めようというスローガンを掲げて、地域移行支援を実践しているところです。ご本人の希望をしっかりと伺うと同時に、アセスメントを深めて、安心して地域生活を送っていただけること、そして自分らしく生活するというをとても大切に考えています。すだちの里の紹介はこれで終わりです。

深呼吸は、もう大丈夫ですか。それでは、上田さんと一緒にお話進めていきたいと思います。

すだちの里には平成21年に入所されましたけれども、その前はどこで生活していましたか。

(上田) 青森の施設にいました。小さい時は千葉のほうにいました。

(二宮) 小さな頃は千葉の福祉園に入所をされていたということです。青森から東京に戻りたいと思った理由を教えてください。

(上田) 東京に戻りたい理由は、東京に来て知り合いの人や友達に会えるからです。東京で住みたいと思ったからです。東京で困ったら、相談したり話を聞いてもらえるから、安心です。自信を持って頑張りたいと思っていましたからです。だから、東京に来ました。

(二宮) すだちの里に入所をされて、そんな想いの中、すだちの里での生活が始まりました。もともと腎臓の病気をお持ちでしたけれども、東京に戻られてから病気がちょっと悪くなってしまって、週に3日、透析治療に通うことになりました。左手はシャントがあるので、ちょっと重たいものが持てないんですね。透析治療と病気と付き合っていくための生活のルールが多くあります。1つずつ、できることを自分でできるように練習をしていきましたね。何個かご紹介しますと、一日の水分量を自分で管理すること、血圧測定や体調の自己管理、3つ目は通院です。通院は特に大変でしたね。実は、透析病院とシャント専門の病院、そして総合病院、何と3つの病院に通院することが必要です。

どんな練習をしましたか。

(上田) 練習は、バスの乗り方と電車の乗り方です。

(二宮) 何回か一緒に練習に行って、乗換えもできるようになっていますね。今でも3つの病院には、お1人で通院をされるようになっています。

次に、日中での過ごし方について考えました。現在は、すまいる高円寺で週に2回、7時間の就業体験をされています。すまいる高円寺でのお仕事を紹介していただけますか。

(上田) すまいるでのお仕事は、郵便を取りに行くことと、宛名シール貼り、メール便のシール貼り、後、ラミネートをしたり、後、ニュースを3つ折りをして封筒に入れることです。

(二宮) ありがとうございます。すまいる高円寺でのお仕事では、仕事内容を覚えるということはもちろん、通勤やスケジュール管理などなど、仕事をする上で必要なことを練習して習得していかれました。

そしていよいよ、将来の住まいの場についてです。どんな場所で生活したいかを考えるため、グループホームへ見学に行きましたね。上田さんからの希望は、できるだけ少人数のところがいいということだったので、アパートタイプのグループホームに見学に行きました。ご飯は腎臓の病気に配慮した調整食の準備をしていただけたということでしたね。その後、上田さんとの話合いの中で聞かれた言葉は、見学したグループホームもいいところだと思うけど、一緒に住む人とうまくいかないこともあるかもしれない。1番困っている人間関係で悩むことがあるかもしれない。誰かと一緒に住むのは、ちょっと嫌かも、でしたね。そんな中で話を進めていくと。

(上田) 実は、一人暮らしがしたいと思っていました。

(二宮) ここで初めて伺いまして、実は実は、一人暮らしがしたいと思っていましたという言葉をお伺いしました。ずっとずっと一人暮らしがしたいと思っていただけのことです。グループホームの見学の後、グループホームへの前向きな気持ちも伺っていたところだったので、私はとてもびっくりしたんですけれども、急いで話をどんどん進めていくのではなくて良かったな、ご本人のペースで気持ちをお伺いできて良かったなというふうに思ったところでした。上田さん自身も、どんなところが、どんなことができるのか不安と話されていましたけれど、相談しながら、一人暮らしに向けて少しずつ頑張ってみることとなりました。

1つ目は、薬を自己管理するということです。今、写真に載っているのは、ご本人がご自身で管理していただいている服薬ポーチです。処方された薬を自分で確認していただいて、ポーチに入れて管理して、ご自分で服用していただいています。時々飲み忘れとかはないですね。

(上田) ないです。

(二宮) ないですよ。そして2つ目に宅配弁当の注文です。施設では食事の提供が3食ありますけれども、一人暮らしを想定して、調整食の宅配弁当を自分で注文して、ご飯は自分で炊いています。注文はとても難しかったので、支援者の方に手伝ってもらうこととなりました。

そして、貴重品の自己管理をすること、愛の手帳や保険証、医療証、そして日常的な金銭の自己管理をしていただいています。

ご本人にできることが1つずつ増えていった状況があります。すだちの里は入所の施設なので、薬や貴重品を自己管理するということは、実は本来ありません。特に、服薬は体調管理のためにはとても大切です。上田さんは透析も受けているので、1週間に一度、服薬の内容が変わってきます。もう一度お伺いしますが、薬の飲み忘れとか、ちょっとごみ箱に捨てちゃったりとかないですよ。

(上田) はい。

(二宮) ないということなので、とても安心ですね。

上田さんの希望を実現できるように、上田さんのペースで少しずつ体験を積み重ねていきました。そして、さあいよいよ実践です。マンスリーマンションを借りて、一人暮らしに向けた体験をしました。マンションは週に3日通っている透析病院の近くに借りることができました。相談できる時間がほしいという希望がありましたので、1日に1回、支援者と相談できる機会を設定して、困り事を解決できるようにしました。マンスリーマンションでの体験はどうでしたか。どんな感じでしたか。

(上田) 楽しかったです。西荻の203号室に部屋を借りて、体験をしました。とても嬉しかったです。大変なことは、お米をちょっとこぼしちゃってしまい、お米を炊く時がなかなか炊けずに困ってしまって、なかなか炊けるのが炊けませんでした。困ってしまって、スイッチを入れるのを忘れてしまって、慌ててスイッチを入れました。後、ごみ捨てがなかなかわからなかったです。でも楽しくできました。

以上です。

(二宮) いざ、実践をやってみると、家電製品の使い方が変わっちゃったから、ちょっとわからないとか、スイッチを入れ忘れてしまって、ご飯の時間だけお米が炊けていませんでしたとか、お米が床に散らばっちゃったとか、そういったことがいっぱいありました。1人でとても気楽で楽しかった、友人と近くで待ち合わせをしてとても面白かったということもあったり、楽しいことと、やってみて初めての経験ということがいっぱいありました。途中で、マンションの工事も入っちゃって、とてもびっくりしましたね。

そんな体験を積み重ねながら、次のスライドに移っていきます。

ご本人を中心というスライドになりますけど、よく見ると、上田さん、たくさんの人に囲まれていますね。

(上田) はい。

(二宮) 上田さんを中心に、顔の見えるチームをつくってきました。そして、白い丸のところは、もしかしたらこれから増えていくところになるかと思います。今、いろんなサービスの選択ができるようになっていますけれども、居住支援法人、自立生活援助、そして訪問看護サービスの活用などなど、まだまだ深堀りできることがあるかと思います。上田さんの選択肢を1つ1つ叶えていけるように、毎日、勉強、勉強の日々となっています。

続いていってみたいと思います。このスライドは上田さんからお聞きした言葉です。上田さん、じゃあ、お話ししていただいていたいいですか。

(上田) やりたいと思ったこと、言っているのかな？話すこと、相談することが苦手だし、できることが増えると嬉しい。身体が弱いからできないことが多い。できなかつたら、全部できないのかな？やりたいことは何？と聞かれるけど。

(二宮) やりたいことは何って聞かれて、やりたいことは何ですか？

(上田) 一人暮らし。

(二宮) はい。実はちょっと1つ、1歩進んだスライドにいましたけれど、最初はですね、上

田さんわかりませんって答えていらっしやいました。

やってみたことがないことはわからない、聞かれても困っちゃう。そうですね、本当わからないですよね。気持ちがどんどん先にいってるようなのでどんどん続いていこうと思います。

でも本当は。

(上田) 本当は20代の頃からずっと自立した生活が良いと思っていた。まずはやる、そして相談できる人がほしい。コロナで一人暮らしの練習が遅れていることが不安、諦めたら駄目、チャレンジをしてみることが大事、やっぱり一人暮らしがしたいです。

(二宮) はい、やっぱり一人暮らしがしたいという言葉をお伺いできました。皆さんご存知のとおり新型コロナウイルス感染症が蔓延しています。その影響で一人暮らしを実現するための体験や練習が少しずつ遅れていっています。上田さんご本人からも不安という気持ちが聞かれたこと、そして支援者も体のことを心配したということが遅れている理由です。少し支援者として考えてみるとですね、上田さんの体のことを心配する気持ちってというのは、本当にあります。そういった気持ちが駄目なのかなと思ってちょっと振り返ってみたり、そんな中でですね、張り切って一人暮らしへのチャレンジをしてほしいという思いと同時に、安心して生活を楽しんでほしいという気持ちがあります。

上田さん、支援者みんながですね、一人暮らしチャレンジしたい、応援したいっていう気持ち伝わっているといいんですけど伝わってますか。

(上田) 伝わってます。

(二宮) でもこれってちょっと私の気持ちですよね。ちょっと支援者サイドの気持ちになっちゃったのでちょっと戻そうと思います。ごめんなさい。でも、不安があるということはとってもわかりました。

お話も最後になってきましたけど、実はここからはあまり打ち合わせをしていないところなんです。まだお伺いしていませんでしたけども、これまでいろんなこと振り返ってきました。上田さん、いつから一人暮らしを始めたいと思っていますか。

(上田) 6月とか7月あたり、冬より夏のがやっぱり体に合ってるし、ちょっと夏のが強いから夏のほうに優先してほしいなと思ってます。

(二宮) 来年の。

(上田) はい。

(二宮) 6月ぐらいからということですか。1つ1つ、コロナもちょっと落ち着いている状況を願いながら体験を積み重ねていきたいと思っています。もしももしも、次にこういった機会がありましたら一人暮らしの実践の報告ができるんじゃないかなというふうに思っています。6月目指して一緒に頑張っていきましょう。

(上田) はい。

(二宮) それでは、これでお話終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(上田) ありがとうございました。

(拍手)

(岩本) 上田さん、二宮さんありがとうございました。非常にほのぼのした気持ちになって、聞いておりました。マンスリーマンションでの一人暮らし体験のお話で、大変だけど楽しいという言葉が、非常に印象に残りました。

また、二宮さんとのお話の中で、「やっぱり一人暮らしがしたい」とはっきりとおっしゃっていた上田さんですけども、最初は「わからない」とおっしゃっていたと。それが、お話の中でご自分の意思を表現されているところだと思いました。先程の新藤先生の話でも体験していないことは選べないというお話と繋がると思います。昨年度のこのセミナーは、意思決定支援が、テーマでした。そこでも意思決定を下支えするもの、その条件が必要だという話になりました。まずは十分な体験、それから自分の声をちゃんと聞いてくれる、相手の存在というんですかね。そういう人間関係が不可欠なんだろうと思いました。

二宮さんと上田さんの関係性が、上田さんの想いを言葉にしていった、そういうプロセスだったのではないかなと思って伺っておりました。ありがとうございました。

それでは2チーム目ですけれども、柳沢さん、古橋さん、こちらもお2人でお話しいただきたいと思います。よろしくお願いします。

(古橋) よろしくお祈りします。今15分スタートですけど、20分でよろしいですか。はい。

すみません、早速始めたいと思います。

ちょっとお話スタートする前に、ちょうど今日は2人で昼休み、昼食をですね、中央公園で。2人でパン食べながら過ごしてたんですけど、新宿は20年ぶりだというふうに柳沢さんおっしゃっていて、いろいろ感慨深いものをこう、感じさせていただきながら、なので今日柳沢さんワクワクもしてるんですけど、非常にどきどきしてですね、今座っていただいています。

今日はカンペも持ちながらお話しさせていただくので、若干棒読みの箇所もございますが、皆さん温かい目で見守っていただきながら、あらかじめご了承くださいながらと思います。

ご本人の柳沢さんのところに、あえて元入院患者さんという自己紹介について皆さん印象的だったのではないかなと思います。今日のお話が、素敵な成功体験で終わらず、地域移行における課題があるってことも皆様に感じてもらうために、柳沢さんの希望でそのような肩書きになっています。

もちろん、今日のこの研修が終わる頃には、皆さんが希望を感じていただけるよう精一杯お話をさせていただきますと思います。

前置きが長くなりましたが、「わたしの退院を今改めて振り返る」というタイトルを勝手につけさせていただきますとお話し始めていきたいと思います。

スケジュールについてはご覧のとおりの流れです。自己紹介、地域移行支援について、柳沢さんの「退院」を振り返る、まとめというざっくりとした流れです。

早速というか自己紹介をしていただきたいと思いますので、柳沢さんお願いします。

(柳沢) 柳沢陽子です。

16年間入院していて、一人暮らし歴8年です。小心者だけど夢見る羊です。あとレインボーハウスに週1回通ってます。これは就労継続支援B型事業所です。青首あひる音楽隊に月3回通ってます。得意なことはお買い物、お料理、お洗濯、イラスト書きです。暮らしていて楽しいことは、特売をチラシで見つけることが楽しいです。暮らしていて大変なことは、スーパーで買った物が重たいです。あと予算内のお金で買わなくちゃならないことです。

(古橋) ありがとうございます。

そしてまだ続きまして、私、古橋陽介と申します。

社会福祉法人ひらいるミナルという母体になります。相談支援センターくらふとに勤務しております。相談支援専門員8年、精神保健福祉士13年目というところで、外部活動では精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築推進事業における都道府県等密着アドバイザーということも行っております。御年37歳になりまして、昔はよくチャラ男とよく言われていましたが、従事する仕事とたくさんの人との出会いで、大人にさせてもらったような感じです。

それこそ柳沢さんとは8年ほどのお付き合いになるんですけど、地域移行支援を利用していた開始の頃からの担当になります。柳沢さんからも、今回いろいろ準備を一緒にしてきたんですけど、その中で、「古橋さんも大人になったわね。」と、評価をいただいております、そういう素敵な時間もいただいているな、なんていうところです。

うちの事業所の理念というところで、「Creating Reasonable Accommodation For “The way we are”」というところ、直訳すると誰もがありのままに暮らせるよう必要な配慮を考えると、この頭文字を取りながら、「くらふと」なんていう名前としています。

実施事業について、特に、ご覧のとおりなんですけれども区事業で、記載されていないんですが、今年度から都事業も受託しているような事業所になります。

相談支援専門員が全部で8名おまして、各職員と分担して事業を行っています。

地域移行支援についてコロナ前は、月12から15名以内の間を推移するような利用者数でした。しかし、現在は10名以下の利用者とコロナ感染状況を見つつ、少しずつ進めているような状況です。最近になってやっと外出ができるような状況になってきました。

そして、本日は指定一般事業所の中の地域移行支援ということについて柳沢さんとお話をしていきたいと思います。

もうちょっと私たちの地域についてということも少しお話ししていきたいと思います。

江戸川区はですね、この西側の22区と千葉県にはさんでいただいている、江戸川区という地域のポジションが特徴的ですが、人口約70万、面積23区内で4番目の広さで、区民1人当たりの公園面積は何と23区1位ということで、非常に暮らしやすい地域ではあるのかなっていうところ、高齢者の方やお子さんが多い地域であったりします。

区内は大きく六つの地域に分かれておまして、それぞれの地域の特徴が特色があります。記憶に新しいところで2020年オリンピック・パラリンピックでは、国内初の人工的水路でカヌー・スラロームの競技が開催されました。

そして、「わたしの住む街」ということで、ここは、わたしということは、柳沢さんを指しているんですけども、そのような江戸川区の中で平井という地域に柳沢さんお住まいです。川に囲まれて緑豊かな地域になるんですけど、まさに下町といった感じの雰囲気、商店街、非常に活気があって住民同士の方の結びつきも強いように感じます。

ということで、私ばかり話していても面白くないので、柳沢さんにも自己紹介をしていただこうと思います。

(柳沢) 平井はこんなところが、素敵です。挨拶をすると、必ず笑って挨拶を返してくれます。素敵なお店がたくさんあります、安いです。大手スーパー、近所の八百屋さん、100円ショップなど、お蕎麦屋さんの前の金魚鉢には「観るだけ(タダ)」って書いてあります。わんちゃん、ねこちゃんをナデナデさせてくれます。

(古橋) ありがとうございます。なんかどちらかのPRをしに来ていただいているような感じなんですけど、平井がとっても素敵なお店ってというのは、柳沢さんが発見してるんですね。後で紹介もしようと思うんですけど、この「平井No.1は、あなただ」というこれは、「初心新聞」と称して柳沢さんが独自につくってらっしゃる、イラスト新聞になるんですけど、こういったもので平井は素敵だななんていうことも表現してくれてます。後でまた紹介します。

ということで、ちょっとここ地域移行支援についてというお話で、皆さんには言わずもがなのところはありますが少し触れておきたいと思います。

地域移行支援は施設入所している方であったりとか精神科病院に入院している方の地域移行を行う事業ということですよ。

地域移行支援でできることは、ご本人と直接会う、一緒に出かけてみたりの同行、3つ目に体験という話になってきます。

3つ目の体験というところに少し注目したいんですけど、福祉サービスの体験利用や体験宿泊ということに分かれていきますが、まず、体験ということについて、入院中から日中活動系の福祉サービスの体験利用ができますということを目指してますね。それから、体験宿泊においてはヘルパー体験や街の活用を体験できるということで、くらふとではこの体験宿泊が地域移行支援の肝と考えております。柳沢さんにも利用していただきました。

グループホームの中に、そういった体験ができる場所ですね、当法人用意しておまして、写真のような生活環境を整えた居室で体験宿泊を実施しています。また区内には、別法人で自立生活体験ルームという名前でも車椅子の方などもご利用できるバリアフリーの体験室なんてものもあります。しかし、区内のニーズから考えると、まだまだこういった場所が足りていないことを感じます。

先程、新藤先生のお話で、支援職員も一度は全員体験する必要があるよねという内容があったんで

すけど、そういえば自分もこの体験室で、同室対応で一晩一緒に過ごしたなあという経験もあって、ただ、柳沢さんとじゃないですよ。ここ笑うところです。別の同性の方と一緒に部屋を過ごしたなあ、なんてことも思い出しました。

ざっと地域移行に触れましたが、ここから今日の本題ということなんでしょう。柳沢さんの「退院」を振り返るということでお話ししていきたいと思います。

まず入院していた頃、どんなお気持ちで柳沢さん過ごされていたかってちょっと教えてもらえますか。

(柳沢) 病院に全部やってもらって楽だったけど、自分が何もできないと思ってました。自分でもいろいろやりたかったけど、やらせてもらえなかったです。その時の気持ちを例えてみれば、ガラス越しに隔離されている感じでした。ガラスは透明だから、手が届きそうだけど実際は手が届かない感じでした。

(古橋) ありがとうございます。非常にお話そのまま、私も聞いた時に印象的な表現なさっていて、壁とかそういうことじゃなくて、透けて見えていて、でもそこが届かないような、その辺の葛藤というか、気持ちを感じさせていただくようなお話でした。

私、初めてお会いした頃、柳沢さんの葛藤ということが早速見えたと思い出します。

ちょっと全部出しちゃいますけど、やりがいのあるものを見つけたい、食事は自炊がしたいなどの前向きな発言の裏にできるかわからない、自信が持てないという悩みも聞こえてきました。

そんな葛藤ということに注目しながら、地域移行支援が始まっていくのですけれど、地域移行支援導入時期、柳沢さんの希望と葛藤を踏まえて、日帰りという選択肢から進めてみようかということで、その後少しずつ宿泊というふうに進んでいったんですね。10年以上の入院がありますということで自分のペースで生活にイメージづくりをしていきたいというお話に寄り添わせていただいていた。

体験宿泊については、ごめんなさいね、画面出しちゃいますね。自炊をしたいという柳沢さんの希望に対して体験室職員が買物や食事づくりの支援を実施しました。さらに給湯器の使い方がわからない体験をとおし、一緒に手順を整理し扱い方を獲得もしました。

苦手なこと、やってみたいことをとおして、実際に明らかにし「自信」や「安心」に繋がっていききました。

そんな体験宿泊を利用しながら、実施されている時間の中で、このイラストが得意な柳沢さんが体験宿泊中に作成したオリジナルの新聞、初心新聞というものになるんですね。これ、お名前の由来なんて教えてもらっていいです。

(柳沢) 題名の由来は、退院した時の初心を忘れないように、1人で生活していくという気概を忘れないようにです。

(古橋) ありがとうございます。独自につくりますということで始まっているんですけど、体験室のお部屋を使ってみてどうでした。

(柳沢) 用意されているお米があきたこまちでした。ブランド米でした、嬉しかったです。体験外泊でカレーをつくったんですけど、それはどうしてかということ、玉ねぎとシーチキンたっぷりの本格的なカレーをつくりたかったんです。それで、体験外泊の最初の時にそれをつくりたいと言ったらスタッフさんがスーパーまで同行してくれて一緒に材料買ってくれたのです。それで、ことごとカレーをつくったら、もうおいしくて、本当に自分で作るお食事ってこんなにおいしいんだと思って、これなら毎日自分でつくって食べたいと思いました。

(古橋) ありがとうございます。当法人は丁寧にカレーづくりまで寄り添うような仕事をしております。

そのほかのイラストでも、いろんな表現をしていただいている、こちらのイラストだと、「いつでも好きな物が買える」という大きなタイトルがあって、とても印象的だなというふうに、ちょっと覗かせてもらってました。

この後は、体験利用についてですね、お泊まりをしながら昼間の活動ということにもチャレンジさ

れていました。柳沢さんは生活訓練事業所の体験利用でイラストを書くプログラムに参加されました。先程の初心新聞のとおり、とても絵がうまい柳沢さん、周りの方からも大絶賛されて手書き以外のパソコンの操作にもチャレンジしてみるなんていうことが出てきました

体験を通じて、また振り返りを丁寧に時間をかけ行い、やってみたい、私にもできるという自己肯定感の回復が見られ、イラストを活かして何かしたいという新しいニーズも、出てきていたように聞いています。

その体験利用についてもお話し、イラスト書いていただいたんですけど体験利用についてはどうでしたか。

(柳沢) すごく楽しかったです。イラストパソコンのプログラムで漫画ができたからです。ペンの使い方や、キャラクターの作り方や、デフォルメの仕方や、ストーリーの組立て方を教えてもらいました。

(古橋) ありがとうございます。元気に棒読みしていただいている感じですけど、皆さんきっとお気持ちは伝わってると思います。

そんなふうに、この体験をしていった結果ですね、体験利用や体験宿泊を利用して約半年の地域移行支援で柳沢さん退院となっています。

この時のイラストが、大きく描かれていて、実は左側に僕もいるんですけども、実際よりも何でこんなイケメンに書いてくれるのみたいな感じで、いつもヨイショしてくれるんですけど、柳沢さん、退院した時はどんなお気持ちでしたか。

(柳沢) やっと退院できるんだと思いました。自分のお家じゃないところで、地に足が着かない生活だったけど、これからは地に足が着いた生活ができるんだなと思いました。

(古橋) はい、ありがとうございます。そうですね、そこも今、引き続き私も一緒に伴走しているというところになります。

まとめになっていきます。

今日は皆さんと一緒につくっている研修なんだなあというふうに思っているんですけど、皆さんのペンの用意をさせていただいてですね、恐らくお手元のもの、約3年と書いてあると思うんですけど端っこ、くいくいと書いて、「8」に直しておいていただいていたいいですかね。柳沢さん、もう約8年経っております。すいません、お手数をおかけします。

退院して約8年が経過しているわけですけど、今、柳沢さんどんなことを感じていらっしゃるかな。

(柳沢) やればできるんだなあと思いました。

(古橋) 非常にワンフレーズですけど、いろいろ感じさせていただくものなんですが、再入院ということはずっとないんです。その秘訣というか、柳沢さん何だと思います。

(柳沢) その秘訣は地域の人たちと馴染むことだと思います。

私はこんなことがありました。栗を持ってきてくれたり、八百屋さんが声をかけてくれたり、スーパーの人がにこにこしてくれたり、つまり寂しくない生活ですね。

(古橋) ありがとうございます。ゆでた栗を近所の方が持ってきてくれたっていう話聞いて、今回私、初めて聞いて、そんなことがあったんだというふうにお話聞いていて、いろいろ考えさせられます。

地域移行支援で、これはふーんと見ていただければと思うんですけど、私のほうでちょっと整理してみたんですね。

退院までってこういう流れなのかなというところで、潜在的な不安であったり、それ以外のものについても、外在化する、見えるようにしていくとか。本人とわかるようにしていくってということで、気づきやモチベーションということが得られ、というか出会い、その人自身の回復に繋がっていくんじゃないかというふうに地域移行支援を分析しています。

そして、体験利用や体験宿泊がとても重要になるとは思いますが、これはすなわち、退院後地域生活



のシミュレーションであると考えております。

では最後に、今、入院している方達に対して、柳沢さんメッセージをお願いしたいと思います。

(柳沢) 患者さんには、あきらめないでもいいんです。退院を手伝ってくれる人もいるし、退院してからもサポートしてくれる人はいっぱいいますから。

(古橋) ありがとうございます。支援者の方たちにもメッセージをお願いしたいなと思いますが、いかがですか。

(柳沢) 私は15、6年間入院していて、たった半年で退院にこぎ着けたので、重症の人でもいい支援があれば退院できるんです。だから、どうかよろしくお願いします。

(古橋) ちょっと待ってください、ちなみにいい支援ってどんな支援だと思います。

(柳沢) 相手の立場になって考えてくれる、あとは相手に対する思いやりだと思います。

(古橋) ありがとうございます。すみません、たくさん質問しちゃったんですけど、柳沢さんまだまだいろいろなたくさん素敵な、体験なさっていらっしゃるし、一方で大変な思いも、もちろんしてきたところ、今、生活されていて、そこで出会う課題なんてということもあるわけですけど、非常に前向きに柳沢さん自身が暮らしてらっしゃるってところが、私も励みにさせられてるような状況です。

たくさん、なので聞いてしまいたくなるので、時間がまだほんと足りないんですけど、ちょうどぴったりですかね。時間いただきましたので皆さん、ご清聴どうもありがとうございました。

(拍手)

(岩本) 柳沢さん、古橋さん、ありがとうございました。

お2人の掛け合いも非常に絶妙と言いますか、そして江戸川区への愛というものが溢れてましたね。新藤先生も江戸川区のご出身と伺いましたので、いろいろな思いを感じられたんじゃないかと思えます。先程、柳沢さんが、入院中は楽だったけど自分が何もできない人間のように、ガラスの中に閉じ込められてるような感じだったというお話がございました。

先程の上田さんのマンスリーマンションの体験が、大変だけど楽しいということと、すごく対照的な言葉だなと思いました。

また古橋さんが相談支援専門員として8年を経過して、本当に柳沢さんの退院後の生活を一緒に歩まれたのかと思いますと、先程の新藤先生が支援者の意識が変わっていくことがとても大事というお話を受けて、支援者も、ご本人さんと関わる中で育てていただくのかなと思って伺っていました。

また最後に8年間再入院なく暮らしてきた秘訣ということで、寂しくない生活というのが、すごく大事なテーマではないかなと思って伺っていました。

柳沢さん、古橋さんありがとうございます。この後のディスカッションも是非、よろしく申し上げます。

(司会) では、これからディスカッションの準備をいたします。会場の皆様はご着席のままお待ちください。

(準備)

(司会) では、お待たせいたしました。

パネルディスカッションは、ステージ向かって左側のテーブルに上田さん、二宮さんに、ステージ中央のテーブルに柳沢さん、古橋さんにご着席をいただき行います。

それでは、岩本会長、よろしくお願ひいたします。

(岩本) ありがとうございます。

では、ここからは、ディスカッションに移りたいと思います。まず最初に、新藤先生、4名のパネリストの方の話を伺った感想を一言お願いしたいと思います。

(新藤) はい、上田さん、二宮さん、柳沢さん、古橋さん、本当にありがとうございました。

いくつも学びがあつてですね、上田さんのご報告からは、実は一人暮らしがしたかったんだということで、いろいろな薬の管理とかですね、いろいろなご苦労はあるんだと思うんですが、自分の思い

が、一人暮らししたいんだってという願いがあるから、そういうものも頑張れるんだろうなというふうに思いました。

柳沢さんのご報告からはですね、できるかわからないという葛藤もありながらも、やってみたら、あきたこまちが嬉しかったとか、カレーがおいしかった、これがお2人のこういうお話を聞いて、これが経験を取り戻していくということなんだというのを、改めて学ばせていただきました。

この後のディスカッションでも、いろいろ勉強させていただけるなと思いますので、大変楽しみにしています。よろしくお願いします。

(岩本) 新藤先生ありがとうございます。後でまとめのコメントもいただきたいと思いますが、まずは感想をお聞きしました。

それでは、パネリスト間で少しやり取りをしていただきたいと思います。それぞれのお話を伺って、是非聞いてみたいことがございましたら、お互い聞いていただきたいと思いますけれども、まずは柳沢さん、古橋さんから、上田さん、二宮さんへ、お聞きしたいこと、質問があったら是非お願いしたいと思います。

(古橋) 上田さん、二宮さんの発表ありがとうございます。隣でうんうんとうなずきながら、すごい聞かせていただいていたいました。とてもこう、なんて言うんですかね、たくさん感じさせていただくお話でした。

その中で、上田さんに質問なんですけど、ご病気もいくつかある中、大変な日々の中で、めらめらとしたやる気を感じさせられたんですけれど、そのモチベーションの源って何なんだろうって思っていて、そういったことを教えてもらえますか、

(上田) 一人暮らしのやる気は、今は施設にいるんだけど、やっぱり自分のことは自分でしたいし、いつまでも職員さんに頼っても、自分の生き方だから、職員さんに頼らずに生きたいと思ったから、一人暮らしを目標にして決めました。

以上です。

(古橋) ありがとうございます。ご飯炊いてるって話の時、隣で柳沢さんがすごいうなずいていて、ご飯の共感力すごいんですけど、そうでしたよね、柳沢さん。どうでした、聞いていて。

(柳沢) 全くそのとおりです。

(古橋) 逆にそしたら、あれですかね、ご質問も何かあるのかなと思いますが、いかがですか。

(岩本) よろしいですか、二宮さんから今のお話でありますか。

(二宮) そうですね、一人暮らしがしたいっていうふうに言葉にして出すまでに、どんな想いをされていたのかなといったことを、すごく思いました。言葉にして出すまでに結構長い時間があったと思うのでその間、これは上田さんに私から質問なんですけど、一人暮らしをしたって言い、言うきっかけになったことは、何かあったのですか。

(上田) きっかけは、最初はグループホームを目指してたんだけど、やっぱりグループホームだとやっぱり人間関係もあるし、やっぱり1人で生活やってみて、もしやってみて、できたら一人暮らしをしたいけど、もしできなかつたら、グループホームを目指そうと思っていました。そうやって考えました。

(二宮) ありがとうございます。すごく一人暮らしをしたいとおっしゃった時のことがすごく印象に残ってまして、ずっとずっと20代の頃から思ってたことをやっと言葉に出したってというようなことがあって、その上田さんの想いを受け取って、みんなで応援をしていく、できることを、ご自分でやりたいと言った上田さんの想いを叶えていきたいなというふうに思いました。

そして、2人で話をしている時に、発表させていただいてる時に隣でですね、お2人がうんうんとやっぱりうなずいてくださっていて、ちっさなこの距離感だけでしか聞こえない声だったとは思いますが、ずっとうんうんとうなずきながらあの発表を応援していただいていたこともあって、ちょっと時間押しちゃったんですけど、お話もスムーズに伝えられたのかななんて思いました。

ありがとうございます。

(古橋) すみません、もう1つ質問、二宮さんにすみません、事前に言ってないので、いきなりすみません。

二宮さんがおそらく、頑張りというか、何かこう裏方というか、根回しとかそういうことをなさっていたんじゃないかなってすごく感じていて、お薬やお金の管理ってことは施設入所の中ではなかなかないお話ってことでしたから、いろいろ上田さんのためっていう、コーディネートのためにいろいろ動かれていた、ご苦労というか、何か調整していたりってことがあったと思うので、その辺の二宮さんの、頑張っていましたというか、こういうことしてましたってあたりをちょっとお聞きできたらなって思います。

(二宮) ありがとうございます。何か頑張っていましたと言ってもらえて、もう褒めていただいたようなそんな感じがあるんですけど、実は私1人で何かを頑張ったっていったことはなくてですね、やっぱり上田さんと一緒に、生活を支援させていただいている職員さんと一緒に、上田さんがどんなことができ、どんなことをやりたいのかっていったことの声聞いて、そこからつくっていくことのほうが多かったように思います。

上田さん、ご自分で薬も管理できますよという話の中で、施設の中では結構葛藤があってですね、どんなふうに変えていったらいいだろうというところを、やっぱり立ち戻るところは上田さんの思いや、実現したいことをきちんと実現していけるようにっていうふうにみんな考えていけたっていうことも1番かなと思います。

(古橋) ありがとうございます。

(岩本) ありがとうございます。そうしましたら今度は上田さん、二宮さんから、柳沢さん、古橋さんに聞いてみたいことがありましたらお願いします。

(上田) 一人暮らしを始める時、不安はなかったんですか。

(柳沢) 全てが不安でした。一人暮らしなんて、初めてのことだし、だからスタッフさんをお頼りするしかなかったんです。だから困ったことがあると、すぐスタッフさんに電話してアパートに来てもらって解決していました。そうやって不安を解決しました。

(古橋) 体験利用中のお話だと思うんですけど、今も身近に訪問看護さんがいらっしゃったり、ご自分から出向いて行って、いろんな人と繋がっていらっしゃる柳沢さんなんですけど、先程の不安であったりとか寂しいっていうところには、必ずその人とか場所っていうのが繋がっているんだなど、でも最初にそのそれがあったっていう出会いがきっかけになっていて、そこから先程のご発表の内容になっていくんだらうなというところですね。

(岩本) どうぞ、二宮さん。

(二宮) 1つご質問をしたいんですけど、15年16年と入院をされていた期間があったと思うんです。その退院をしたいんだ、退院をするんだっていう気持ちは、いつ言葉で出されて、誰かに伝えていかれたんですか。

(柳沢) 退院する1年ぐらい前に、だから退院したいなと思い始めて、それから半年ぐらいしたら、スタッフさんの古橋さんとかが病院にいらっしゃって、それからずっと順調にきました。だから、そうですね。

(古橋) そうすると諦めていた時期が私の出会いの前にももちろんあって、そこで、でもちょっとやってみようっていうのが、何かその半年前にあったようなんですけど、何か病院の中でも何かそういうきっかけっていうことがあったんですか。

(柳沢) だから国の制度が変わって、もう退院することになって、患者は、病院側でどんどんどんどん出し始めたんです。それを見ていて、何て言うんですか、いい影響を受けて私もあんなふうで、1人で暮らしたら楽しいだろうなあとと思い始めて、そして半年ぐらい経ったら、古橋さんとか△△さんとかスタッフの方がいらっしゃって、それがよく波に乗れたんですね。すごく波に乗れました。

(古橋) 周りの患者さんの退院していく姿を見て、感化されたというか、影響を受けたっていうことなんですね、だそうなんです。

(二宮) ありがとうございます。ちょっと似たようなことがすだちの里でもあって、すだちの里ではグループホームとかに卒業される時に、やっぱり卒業の会とかそういうことを開くんですね。それでその時に、皆さん参加をしていただくわけなんですけども、ご利用者の方から自分のグループホームはいつ見つけてくれるんだみたいなそういったことを直接言われることもあったりなんかしてですね、とても、そういうふうに関りの環境から変わっていく、そこに刺激を受けるというのはとても大切なことなんだな、なんてちょっと思ったところです。

(岩本) ありがとうございます。本当に、そういった周りの環境の大きさっていうのはあると思いましたが。やはり地域移行が精神科病院でも進められるようになった時に、入院してる方も、「次は自分の番かな」と思い始めるようになったということ伺ったことがあります。

私自身、随分前にある調査で、インタビューさせていただいた長期入院の方が、「何か日記をつけ始めた頃から何となく自分の気持ちが変わって、何となく退院したいなあって思うようになった」と。でも、それを自分から言葉にすることができずにいた時間が長かったとおっしゃっていました。ですので、そういう気持ちが芽生えた時に、どうやってその言葉を聞くのかということが、すごく大事ではないかと思いました。ありがとうございます。

私からも質問なんですけれども、今もいくつか出てきたと思うんですけれども、柳沢さんにしても最初の頃は、退院したいとか自分でこういうことやりたいって気持ちとできるんだろうかという不安、葛藤があったと。上田さんもやっぱり一人暮らしがしたいって気持ちと、自分ができるんだろうかという、そのやりたいって気持ちと、不安が半々、揺れ動くってような状況を体験されてると思いました。

そういった時に、どういった支援者の関わりとか、周りの人の関わりが自分をポジティブなほうに、「やっぱりやってみよう」という気持ちに向かわせてくれるのか、そういった支援者の対応についてお聞かせいただきたいなと思います。

柳沢さんからお聞きしていいですか、

(柳沢) 何でもできるようになるとスタッフさんもすごく喜んでくれるんです、一緒に。だからそれも嬉しいから、やっぱりやろうって気になりますね、

(岩本) ありがとうございます。やったことを一緒に喜んでくれる人の存在、そういう関わりが次に向かう上で勇気づけられるという感じでしょうか。ありがとうございます。

同じ質問を上田さんよろしいでしょうか。

(上田) まだ経験がないんだけど、まだわからない。

(二宮) 今、あの小さなお声でご相談してたのがちょっと、一人暮らしのまだ途中の段階なので、自分自身でご自分で経験がないから、まだ答えとしてわからないですというようなことですかね。

わからないということをつわらないっていうふうに言って、いつもいただいているので、ご自分で自分の気持ちを話したい、わかっていることについては、しっかりと久美子さんおっしゃられると思うんですが、上田さんご自身の中でまだ途中っていうところもありますか。

(上田) うん。

(古橋) 補足していいですか。先程、上田さんの資料の中で、やりたいことは何と聞かれるけど、ここはわかりませんでしたって話で、そこに二宮さんとか、周りの方たちが注目して一緒に関わってくれたんで、やっぱりそういう人たちが、上田さんは結果的に、そういう人たちがいてってところは、1つの、なんて言うんですかね、期待している支援者の方たちだったんじゃないかなっていうふうに感じました。感想です。

(岩本) ありがとうございます。まさに上田さんが、今ちょっと揺れ動きながら、1歩1歩進んでいらっしやるのかなと思いました。また、わからないってことを言って、それで一緒に考えていくってことがとても大事なプロセスではないかと伺って思いました。ありがとうございます。

非常に限られた時間ではありますが、フロアの皆様からも、是非パネリストの方に聞いてみたいこと、あるいはパネリストのお話を聞いてこういうことを感じましたということ、1人、2人

にですね、是非ご発言いただければと思うのですけれどもいかがでしょうか。

(参加者) ○○と申します。うちにはダウン症の男の子、37歳になります。

それでいつも本人の自立ということってお話をするんですが、今皆さんの関わりを見て、親はどうも大変難しいな、本人の自立に向けての気づきっていうのがなかなかできてないなって、これ自分のことですが、今日はとてもそのことを感じさせていただきました。ありがとうございました。

(拍手)

(岩本) ありがとうございます。親御さんとしてのご本人の自立への気づきがなかなか難しいというご発言をいただきましたけれども、この件に関して、二宮さん、古橋さんいかがでしょうか。何かありますか。

(古橋) よろしいですか。お話ありがとうございます。

柳沢さんは、お父さん、お母さんもご存命で地域移行支援している時からですね、あえてなんですけど、一緒に関わっていただくようなことをしてました。病院から荷物を運びますっていう時も、わざわざご自宅を経由して、お家に何か必要なものを一緒にあるんじゃないかなって言って、荷物を一緒に、そこでお父さん、お母さんと確認したりとかいう中で、お願いしますねとかいろいろ言われたりもあるんですけど、こちらとしても一生懸命やらせていただきますっていうことをお話しできる機会だったりもしたので、そういったところもやはりとても大事だなんていうふうに思っていて、今のお話聞いて思い出しました。今日実は発表することは内緒で来ていて、柳沢さん、都庁行ってきますと言ったらお父さん倒れちゃうかな、みたいな感じで内緒にして、後で動画も見れるよっていうことでちょっとお父さん、お母さんに見ていただこうかななんていうところです。

(岩本) 柳沢さんから何かありますか。ご自分の親に対する想いというか。

(柳沢) もう親も高齢なので、心配はかけたくないです。

(岩本) 子ども親を想ってるということなんですね。二宮さん、上田さんいかがですか。

(二宮) 自立っていったところだと思うんですけども、そうですね、施設の中で入所施設での経験がとても私は長くなってしまってるので、つついちゃってしまっていることが多いんじゃないかなっていうことを柳沢さんのお話からもちょっと思ひまして、ご本人、上田さんからも先程、わからないって言葉があったように、わからないことはわからないって言っていただきたいですし、やってみたって言ったことをやってみたい、そしてそれを応援していけるようにいたいなというふうに思いました。それは、きっと1人1人違ったり、そのタイミングその時によっても違うっていったことがあるのでしっかりと相談をしながらですね、進めていければなっていうふうに思ったところです。

上田さんは、小さい頃からいろんな人に囲まれて育ててこられたと思うんですが、今日はお声をかけた人たちはいらっしゃいますか。

(上田) います。

(二宮) どんな人に、私も知らない方々がいっぱい来たりしていて、ちょっとびっくりしちゃったんですけど、ご自分で携帯電話でお話されたということなんですが、どんな方お誘いしたんですか。

(上田) 昔からお世話になってる◇◇さんとか、後、今、すまいるで働いてる職員の皆さんとか、声をかけて、こういう機会だから来てほしいなと思って、誘いました。

(二宮) 全然、私も出会ったこともないような方が、皆さん、今日、上田さんに挨拶をされて、応援してくださってるんだなというふうに思ひまして、上田さんのパワーというかエネルギーなのかなというふうに改めて思ったところです。ありがとうございます。

(岩本) ありがとうございました。

確かにその自立って言った時に、先程、新藤先生のご講演の中でもありましたけれども、それぞれの立場でどのように地域移行とか地域の生活をとらえていくか、それぞれのとらえ方や思いが合わさっていくことが必要になってくるのかなと伺って思ひました。ご発言ありがとうございました。

そうしましたら、パネルディスカッションも時間も大分終わりが近づいてきておりますので、これまでのパネルディスカッションの内容を総括して、新藤先生にコメントをいただきたいと思ひます。

よろしく申し上げます。

(新藤) 本当にありがとうございました。大変勉強になりました。

3つのことを考えましたので、それを簡潔に述べさせていただきたいと思います。

1点目は、先程、コメントさせていただいたことに重なるんですが、やっぱりこういうふうに住生活したいんだって、生きたいんだっていう思いが大事なんだなというふうに思いました。そういう自分で決めたことがあるからですね、苦勞ですら楽しみになるっていうか、私はちょっとご飯つくったりするの逆に面倒くさかったりするんですけど、そういうものですら日々の人生というか、生活を色づけていくことができる、それはやらされてることではなくて、自分で決めたからそうなんだなと、やっぱりそれが大事なんだなっていうことを1点目に考えました。

2点目は、先程のフロアの方からのご質問を受けまして、支援者としての関わり方、それからの自立って一体何なんだろうかということについて考えました。

1つ目の支援者っていうのはですね、私も学生と一緒にそのストレングスモデルっていうのを勉強するんですが、そのストレングスモデルの中ではですね、支援者っていうのはご本人、障害を持つご本人っていうのは実はその雇われた友人ではなくて、真の友人を求めているんだというふうに書かれていたりします。

また、サービスを仲介したり、ご紹介したりというのも、ソーシャルワーカーの仕事だったりするわけですが、クライアントの方、ご本人の求めているのは、旅の旅行会社ではなくて、一緒に旅を楽しんでくれる人なんだと、そんなふうに書かれてるわけですね。

今日の4人の方の発表を聞いて、これが旅と一緒に楽しむっていうことなのかというのを学ばせていただきました。

そうすると、自立って今度なんだというふうになってくるわけですが、自立というのは実はいろんな人に頼りながら生きていくことが自立であると。

これもストレングスモデルに書かれてるんですが、もし仮に自立が自分で何でもかんでもできなければいけないということであれば、恐らく裕福な人ほど自立してない。いろんな人に頼りながら、生活している人が多いので、例えば大統領は自分で子育てしなかったりとかですね、自分で買物に行かなかったりとかするわけなので、いろんな人に頼りながら、生きていく。それが自立だということだと、かなりですね、自立の形を見せていただいた、そういう報告だったんじゃないかなと思いました。これが2点目でございます。

最後、3点目でございますが、お2人の経験、4人の方のですね、上田さん、柳沢さんの経験、それからそこに寄り添った支援というのは、非常に素晴らしいものだなというふうに思いました。

私、現場に入った時に、この仕事はセンスだというふうに言われましてですね、これが二宮さんがいるから、古橋さんがいるからできましたということでは、やはりいけないだろうと、自分で若干、私の報告に重ねてしまうんですが、こういった経験をしっかり積み重ねて、同じままでとは言わないまでも、似たような取組がどこでもできるんだと、誰にでも必要な支援を届けることができると、そういう仕組みをみんなで考えていく、それが協議会であつたりとか、今日お集まりの皆様と協働していくということなんじゃないかなと思いました。

本当にたくさん学ばせていただきまして、ありがとうございました。

(岩本) 新藤先生、ありがとうございました。

お二方の体験のプロセスをお聞きしましたけれども、そこから、人として生きる上で共通するものを何か痛感しました。寂しくない生活とか、何かあつたら人に聞けるとか、ご飯をつくっておいしいとか、ちょっと失敗しちゃったけれども面白いとか。そうやって日々、決められたレールに乗るんじゃないかって、自分でこうしよう、ああしようって道を決めていく、そういった日々の1歩1歩っていうんですかね、それがまさに地域生活っていうことなのかなと思いました。

これは自立支援協議会のセミナーでして、新藤先生からも自立支援協議会への宿題といいますか、協議会の担うべき役割というお話がご講演の中にもありました。

今回は、地域移行をテーマに、皆さんと一緒に考えてまいりました。ここには、いろいろな立場の方がいらっしやると思いますけれども、地域の自立支援協議会に関わっていらっしやる方も多くいらっしやると思いますし、様々な形で、地域活動に取り組んでおられると思います。

私もある自治体で地域自立支援協議会に関わっているんですけれども、まさに今、地域移行について協議を進めていて、市民で精神科病院に1年以上入院している方が、何人いるっていうのがデータで、今、見れますよね。市民のなかで何人の方が待っているんだということを確認したところなんです。

いろいろなデータで数字がよく出てくるんですけれども、その数字には必ず1人1人の顔があるはずで、柳沢さんが16年入院されていたとおっしゃってましたけれども、柳沢さんのような具体的な方が、そこに1人1人いらっしやるんだということを我々は肝に銘じなければいけないと思います。また皆様の地域で、この課題について誰かと一緒に共有していただいて、今日の話も共有していただいて、できるところから取り組んでいただければと思っています。

最後の会長としての言葉もまとめて言わせていただいたんですけれども、今日は本当素敵なお話をしていただきました、上田さん、二宮さん、柳沢さん、古橋さん、そして新藤先生、本当にありがとうございました。拍手をお願いいたします。

(拍手)

(岩本) ありがとうございます。それでは司会にお返ししたいと思います。

(司会) ご登壇をいただきました皆様、本日はどうもありがとうございました。改めまして、皆様の盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

(司会) ありがとうございます。

本日お配りをしております冊子にあるご登壇いただいた方々の資料につきましては、明日、12月14日正午には、東京都心身障害者福祉センターのホームページに掲載をさせていただきます。冊子のほうは白黒ですけれども、ホームページではカラーで見られますので、是非そちらも、ご参照いただければと思います。よろしく願いをいたします。

本日ご来場いただきました皆様、長時間にわたりまして、ご清聴いただきましてありがとうございます。

以上をもちまして、令和3年度東京都自立支援協議会セミナーを終了いたします。

最後、事務連絡がございます。

(事務局) 事務局からご連絡いたします。

次回以降の参考とさせていただきますので、アンケートへのご協力をお願いいたします。お帰りの際、ロビーに設置してある机の上に置き、ご提出ください。

皆様、お忘れ物ないようにお帰りください。